上ノ國遺跡

―檜山郡上ノ国村字上ノ国竹内屋敷遺跡発掘調査報告書―

北海道檜山郡上ノ国村
同　上ノ国村教育委員会

1周年祝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上ノ国遺跡

―檜山郡上ノ国村字上ノ国竹内屋敷遺跡発掘調査報告書―

題字　上ノ国村長　沢村才蔵

序文　上ノ国村長　沢村才蔵

上ノ国教育委員会教育長　中島勉

第一章　緒言……一
第二章　遺跡の状態……二
第三章　遺跡調査の経緯と調査研究日誌……六
第四章　出土の遺物……一〇
Ⅰ　第一層出土品……一一
Ⅱ　第一層上の住居遺構……一三
Ⅲ　第三層―第四層出土品……一三
第一節　土器……一三
第二節　石器……一五
第三節　装身具……四〇
第四節　自然遺物……四一
一　動物骨格類……四一
二　貝類……四一

第五章　上ノ国遺跡総括……四一
参考文献……四五

序

上ノ国村は今はうらぶれた一寒村に過ぎませんが、松前藩の始祖武田信広公の居城があつたこと、地理的に北海道の南端に位置して本州の文化が早く移入された等の関係から、北海道文化発詳の地として、史蹟・遺跡が非常に多く、上代文化研究の上に貴重な資料を提供して居ります。

上国寺、勝山館跡、花沢館跡等既に三件が道文化財に指定され、夷王山周辺に見られる百数十の墳墓群についても一部は明治大学後藤守一教授の手によつて発掘され、学問的に非常に興味のあることが証明されましたが、近い将来において、北海道大学北方文化研究室の手によつて更に研究が進められることゝなつて居り、更に一件の指定文化財が加えられる見透しが強くなつてまいりました。

当村周辺においては諸所に土器、石器等の出土品が発見され、これ等の研究が当村在住の上ノ国八幡宮々司松崎岩穂氏の手によつて進められて来ました。幸いにも北海道大学医学部解剖学教室大場利夫博士の指導のもとに、渡辺兼庸氏、松崎岩穂氏の御協力を得まして、三十四年八月に本格的に発掘作業が行われ、遠い道文化を解明する重なる資料数百点を得まして、爾来その出土品の整理、復元の仕事が続けられましたが、本年四月漸く完了しまして、この度これが報告書を刊行する運びに至りましたことは誠に喜びに堪えません。

この研究報告書の刊行に当り大場博士をはじめ、それに御協力下さつた方々に対し、衷心敬意と感謝を申し上げると共に、この報告書が北方文化研究の上に裨益することを信じまして広く御紹介申上げる次第でございます。

北海道檜山郡上ノ国村長　沢村才蔵

同　上ノ国村教育委員会教育長　中島勉

写真1　上ノ国遺跡の遠景

写真2　上ノ国遺跡発掘前の状態

写真3　遺跡の地層の状態

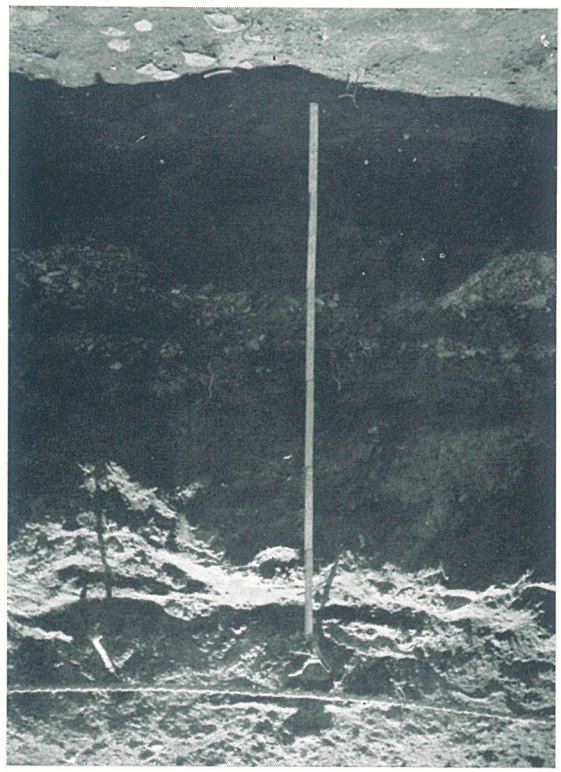
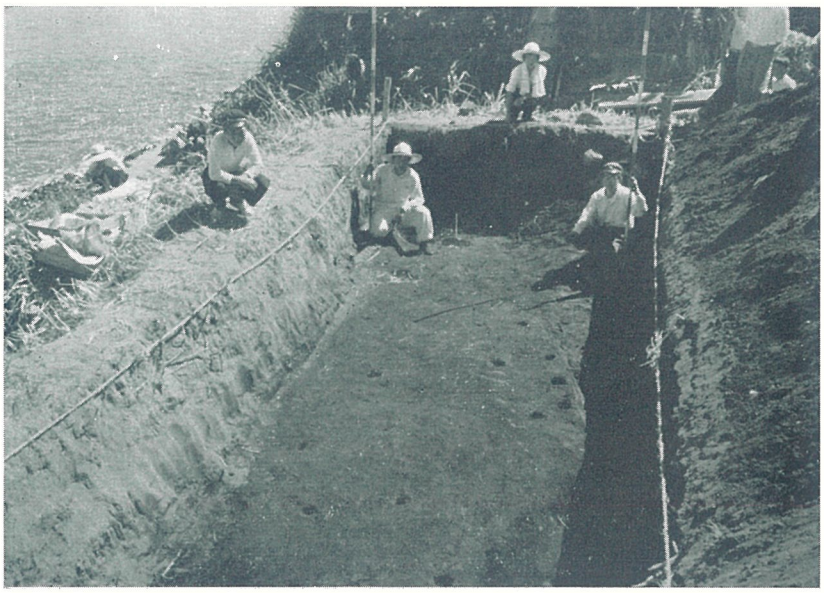


写真4　遺跡の発掘状況

写 真 5　遺跡の内部に認められた住居遺構



写 真 6　住居遺構における柱穴の状態

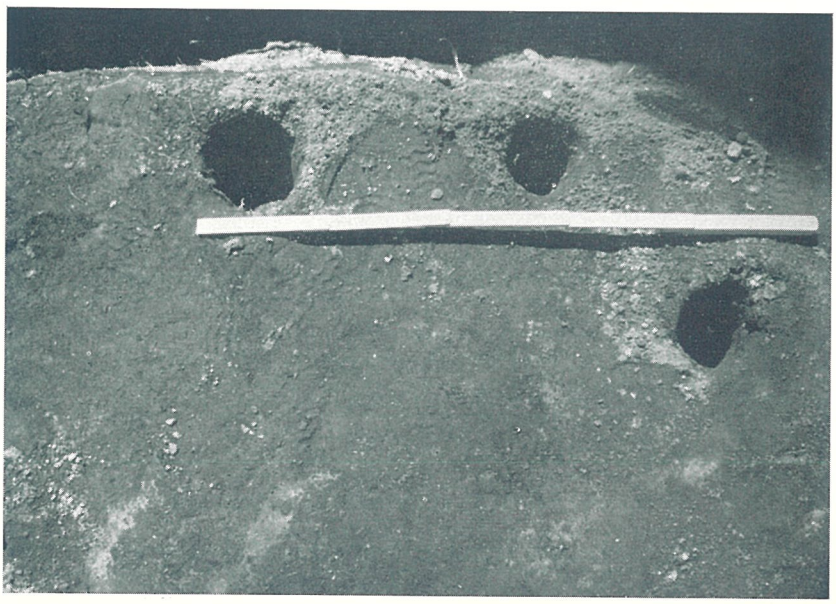


写真7　遺物の出土状態

写真8　遺物の出土状態

写真9　土器の出土状態

写真10　土器の出土状態

写真11　石器の出土状態

写真12　石器の出土状態

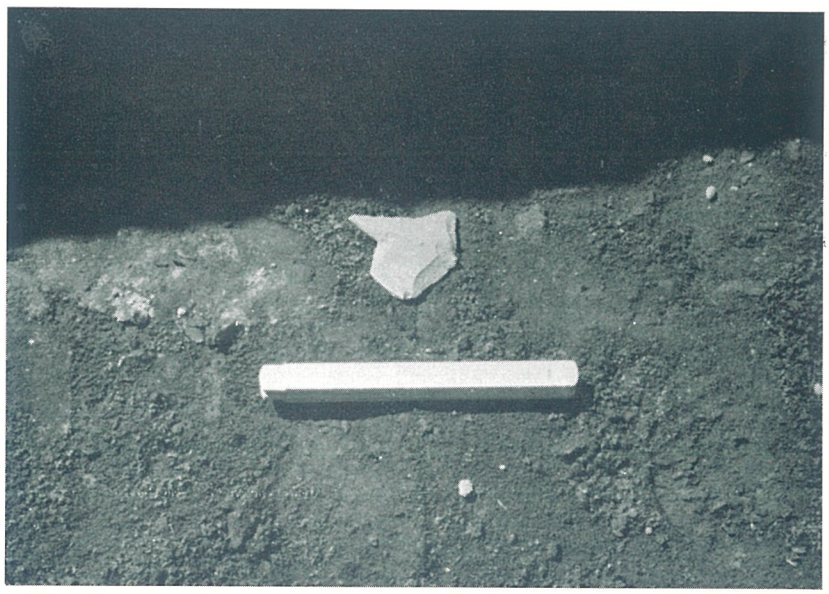


写真13　石器の出土状態

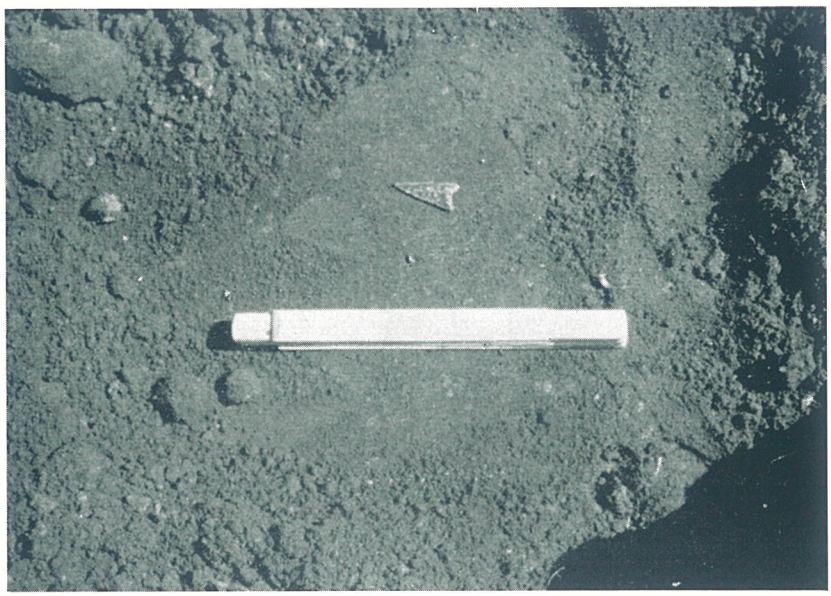
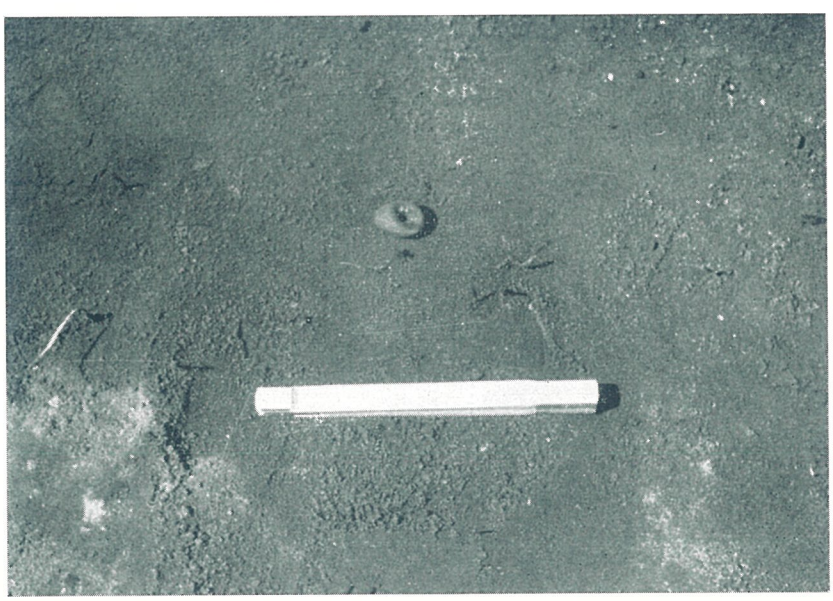
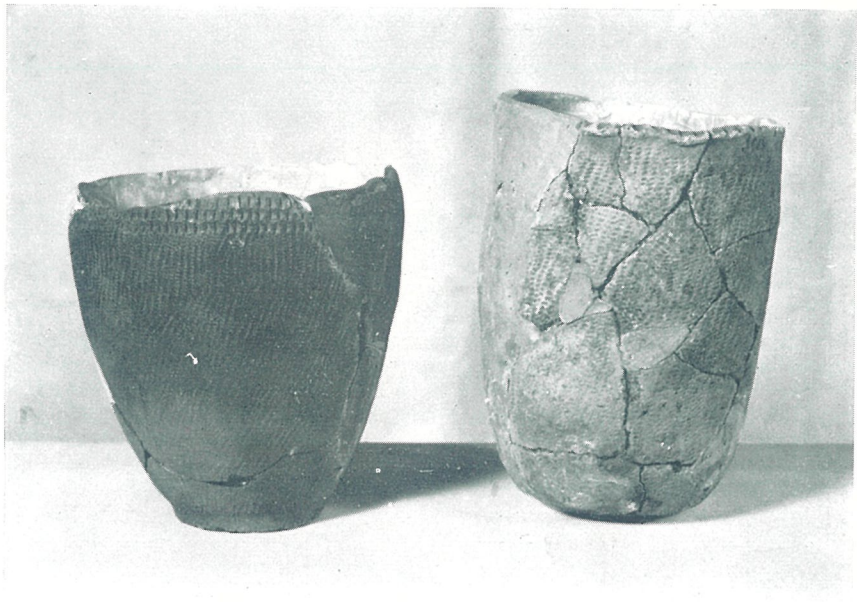


写真14　装身具の出土状態



写 真 15　第一類土器（左A.2　右A.5）



写 真 16　第 一 類 土 器（A.4）

写 真 17　第 一 類 土 器（番外１）

写 真 18　第三類土器（左番外２　右番外３）

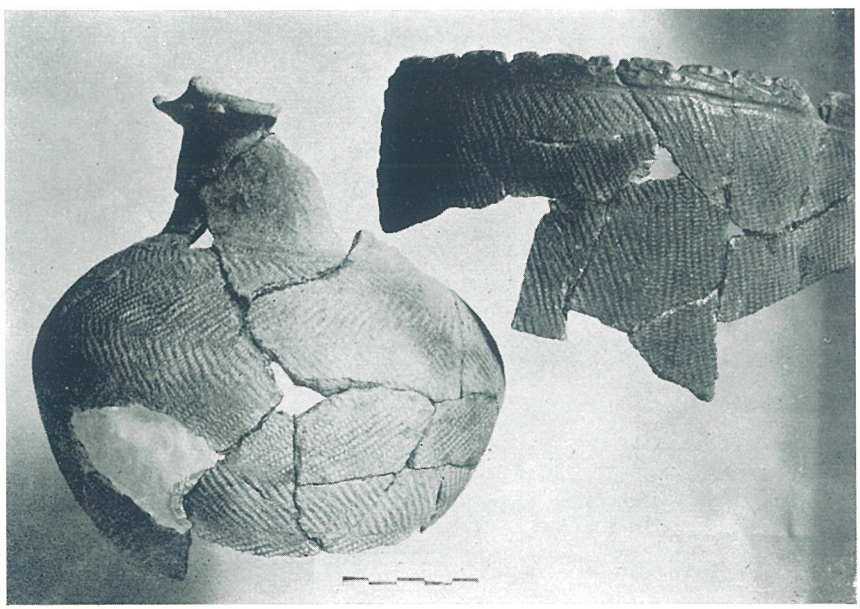


写真 19　第三類土器（A.1）

写真 20　第三類土器（A.3）

写 真 21　第 四 類 土 器（A.336）

写 真 22　第四類土器（左A.338　右A.337）

写真 23　第一類土器破片

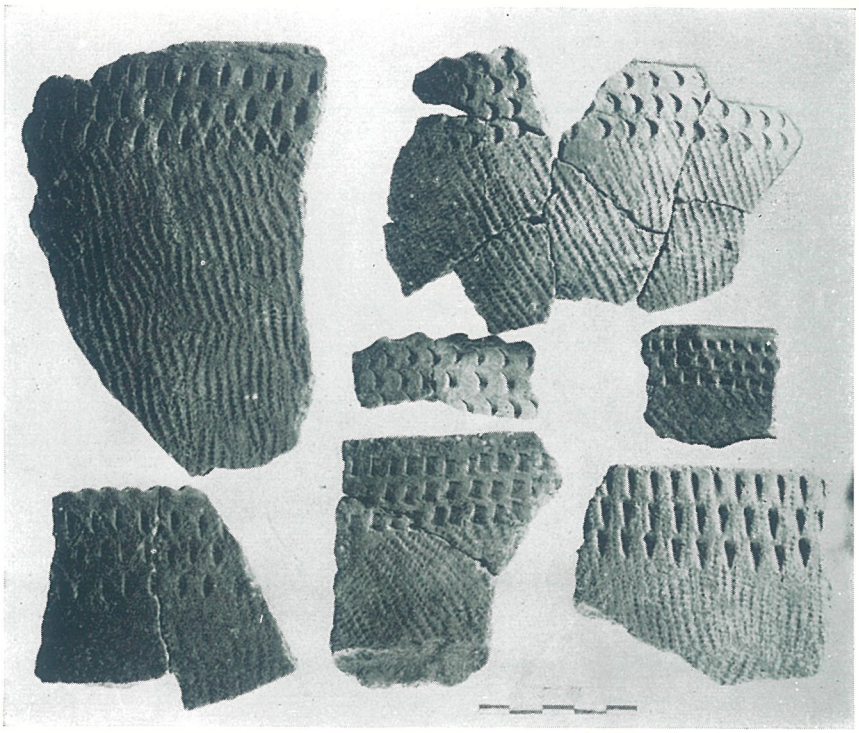
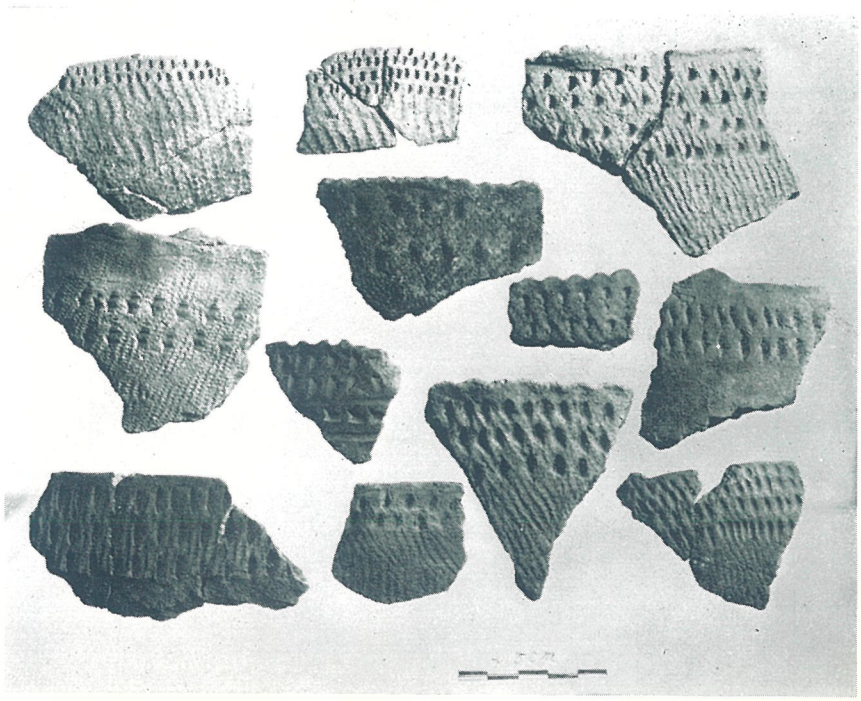
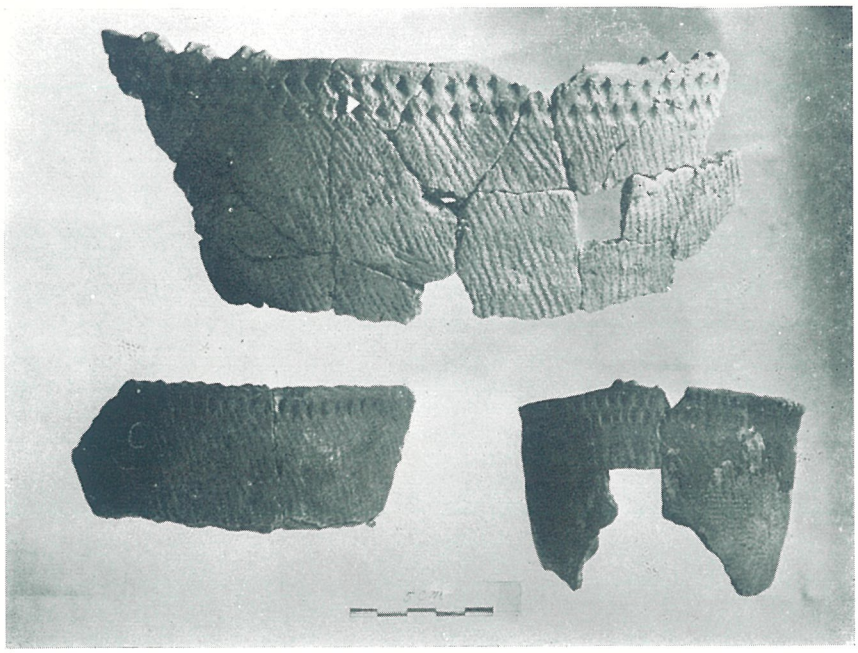


写真 24　第一類土器破片



写 真 25　第 一 類 土 器 破 片



写 真 26　第一類、第二類土器破片

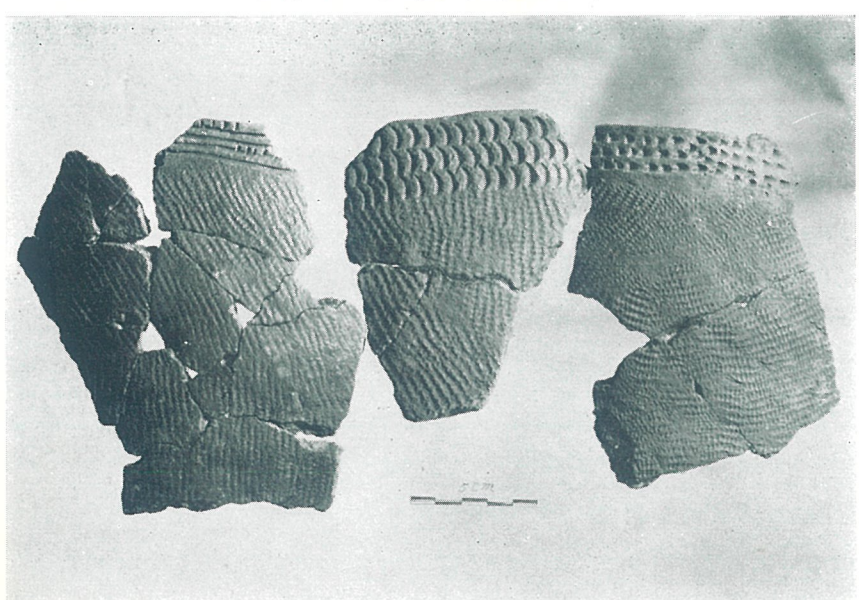
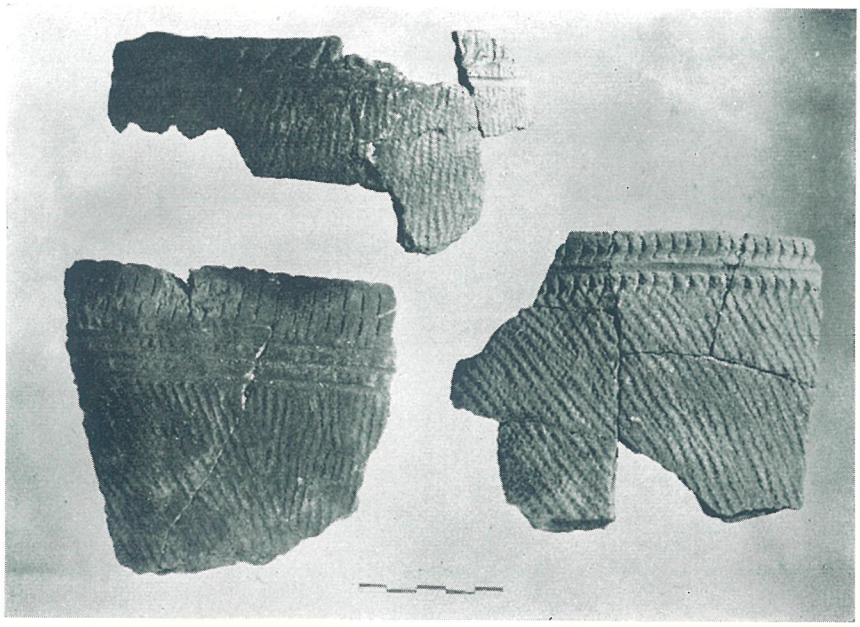


写真27　第二類土器破片

写真28　第二類土器破片



写 真 29　第二類、第三類土器破片

写 真 30　第三類、第四類土器破片

写真31　第四類土器破片

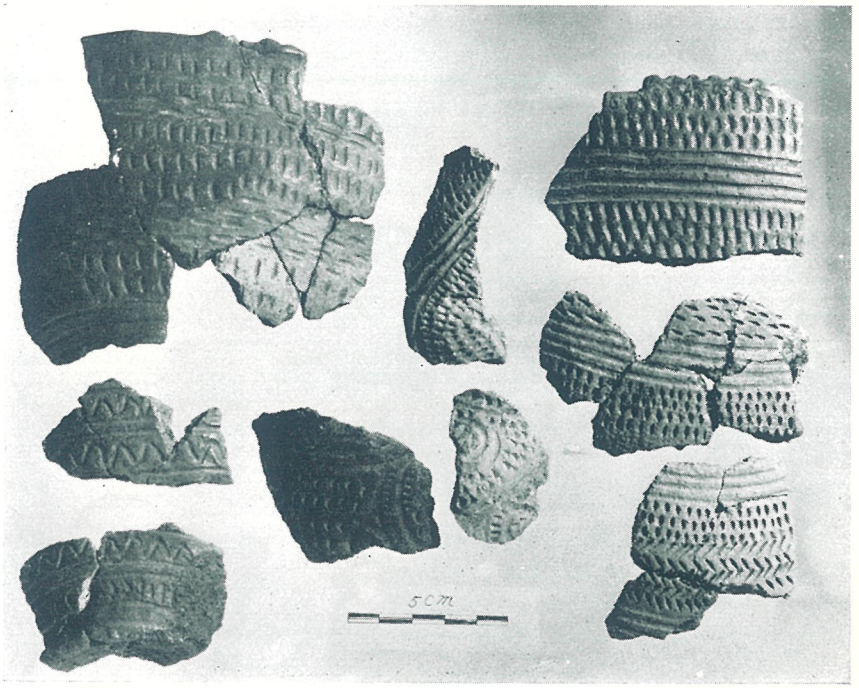
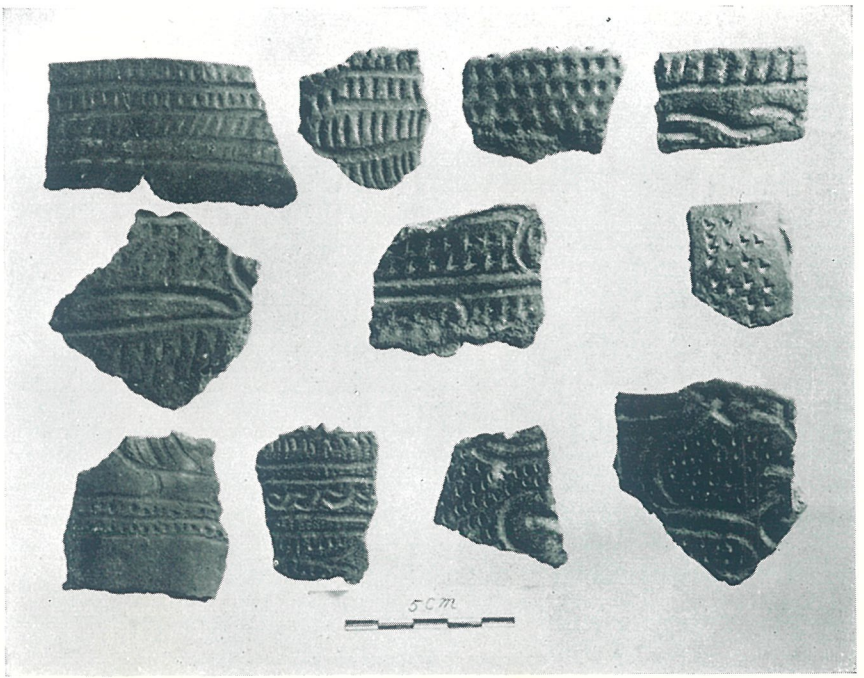
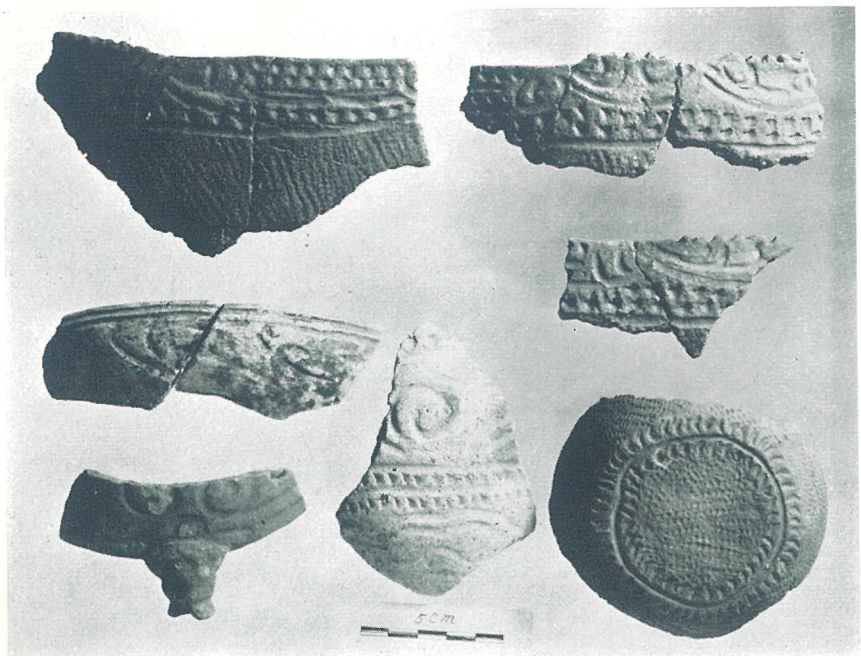


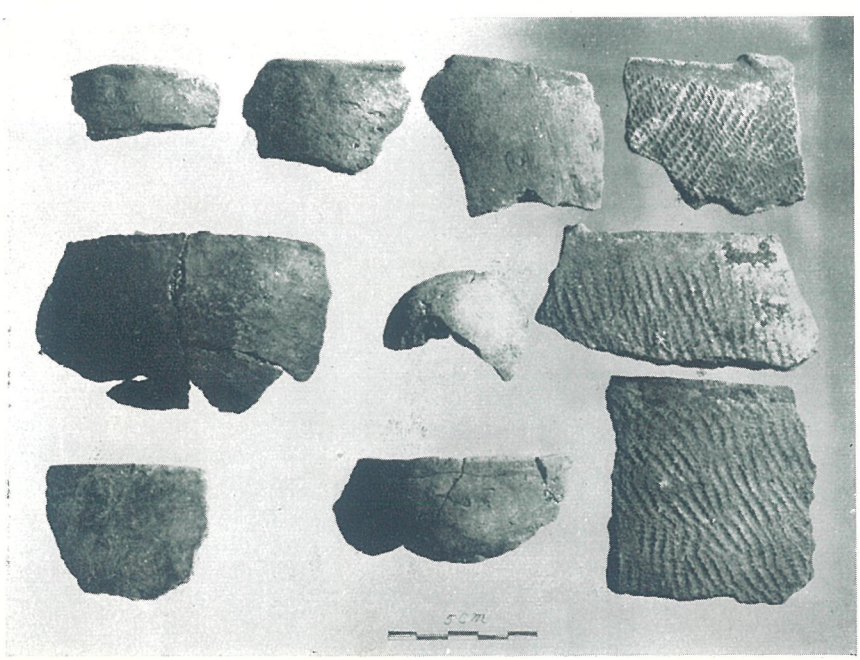
写真32　第四類土器破片



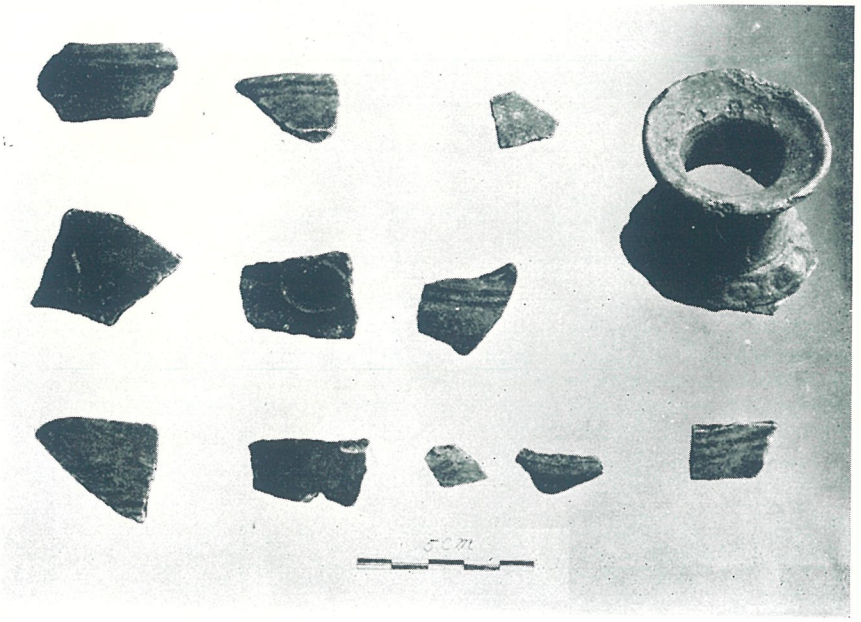
写 真 33　第三類、第四類土器破片



写 真 34　第一類、第四類土器破片



写 真 35　第四類（朱塗）土器破片



写 真 36　上層出土の擦文式土器及び須恵器

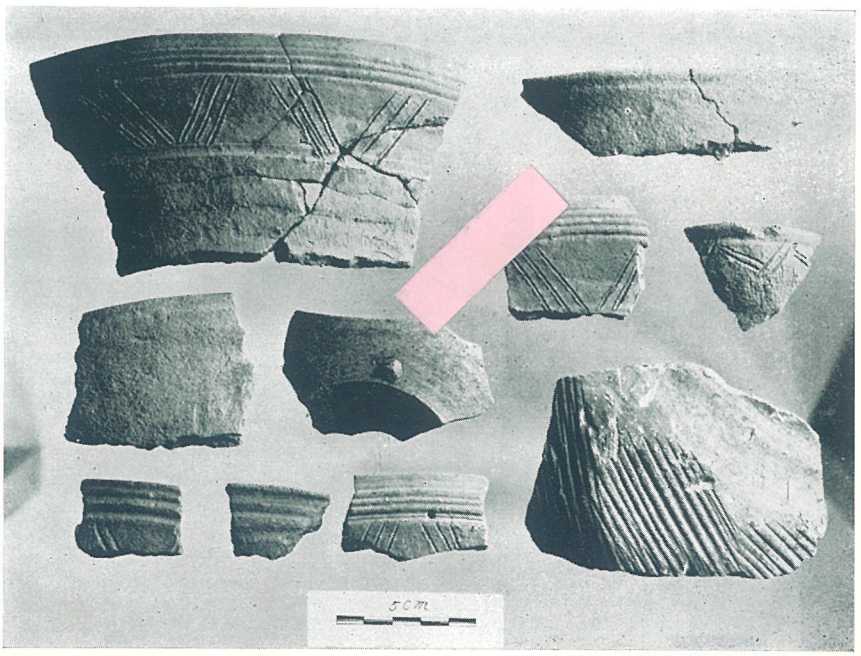


写真37　出土の石器類

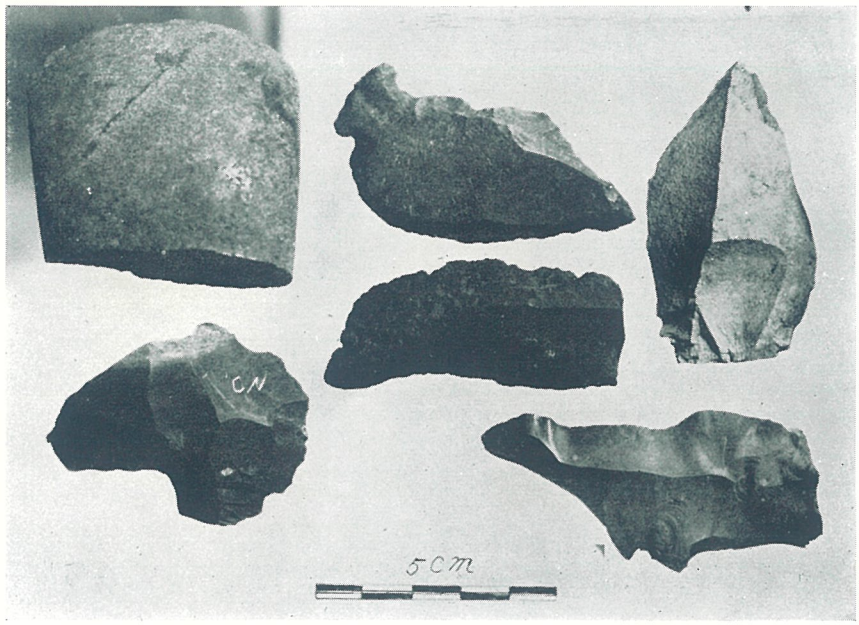
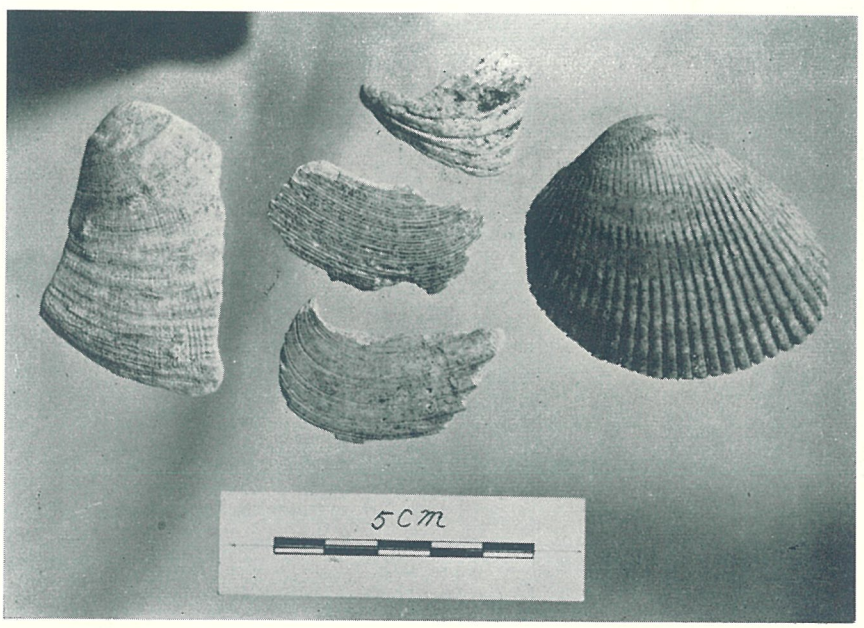


写真38　出土の石器及び装身具

写真39　出土の骨格類

写真40　出土の貝類



上ノ国村附近の地図

上ノ国遺跡

―檜山郡上ノ国村字上ノ国竹内屋敷遺跡発掘調査報告書―

大場利夫
松崎岩穂
渡辺兼庸

第一章　緒言

上ノ国遺跡は、北海道桧山郡上ノ国村字上ノ国市街地川合政義氏宅地の裏手に当り、大澗湾に臨んで所在している。すなわち江差線上ノ国駅から中外鉱山行のバスで二粁、上ノ国停留所から市街地並みに一五〇米で同地に達する。

本遺跡の存在する宅地は、もと竹内氏の所有地であつたので、昭和三〇年刊行の「桧山南部の遺跡」には遺跡名を「竹内屋敷」とし、左のように記したが、ここに再録する。

竹内屋敷。上ノ国市街地の竹内吉蔵氏屋敷の裏手に当る海沿いの地面は、年々時化に削られているが、昭和三〇年二月の時化の際に大きく削られた。それによつてその切割に土器片が層をなしていることがわかつたので、隣家の笹浪竹造氏に依頼してその一部を収集することができた。その後本地は再び削られたので、今は僅かに土器破片を散見するのみになつている。なお本遺跡からは他遺跡には見られない型式不明の、おそらく前期の土器と思われる破片が数片出土している。石器は破片が僅かに見られるのみである（第一一―第一二図及び写真一一参照）。

前述の文章に見られる「他地域に見られぬ型式不明の土器」についての解明は、年来の宿題となつていたので、昭和三四年上ノ国村教育委員会は、その正式調査を企図し、北海道大学医学部解剖学教室児玉作左衛門教授並に伊藤昌一教授に大場利夫の派遣を乞い幸に諒承を得たので、八月三日から五日に亘つて発掘調査を実施した。

調査の結果、本遺跡は、主として縄文晩期の大洞B乃至大洞B－C式に比定しうる遺物を包含する遺跡であることが明らかとなり、しかもいわゆる亀ヶ岡土器分布圏内の他地方の土器に比べて著しい特色が見られるので、上ノ国式土器と仮称することにした。

上ノ国市街地には、大澗湾に望んで他にも類似の遺跡の存在が見られる。すなわち三三年九月市街地の海岸護岸災害復旧工事に当り、大澗湾の凹部にあたる草間恒二氏宅地裏手において、標高が水平線すれ〳〵の護岸基部から上げられた泥土の中に、鉄錆の付着した多数の土器片が発見された。それらは復原可能な土器一ケを含むが本遺跡出土の土器に類似している。また三四年七月大澗港簡易漁港工事施行中、砂礫置場の構築により、標高四米の海沿いの地点でも、同型式の土器破片が出土している。これらの事実から推察すれば、本沿岸一帯には縄文晩期の遺跡が存在していたものと考えられるので、本地域を総称して上ノ国遺跡と名付けることにした。

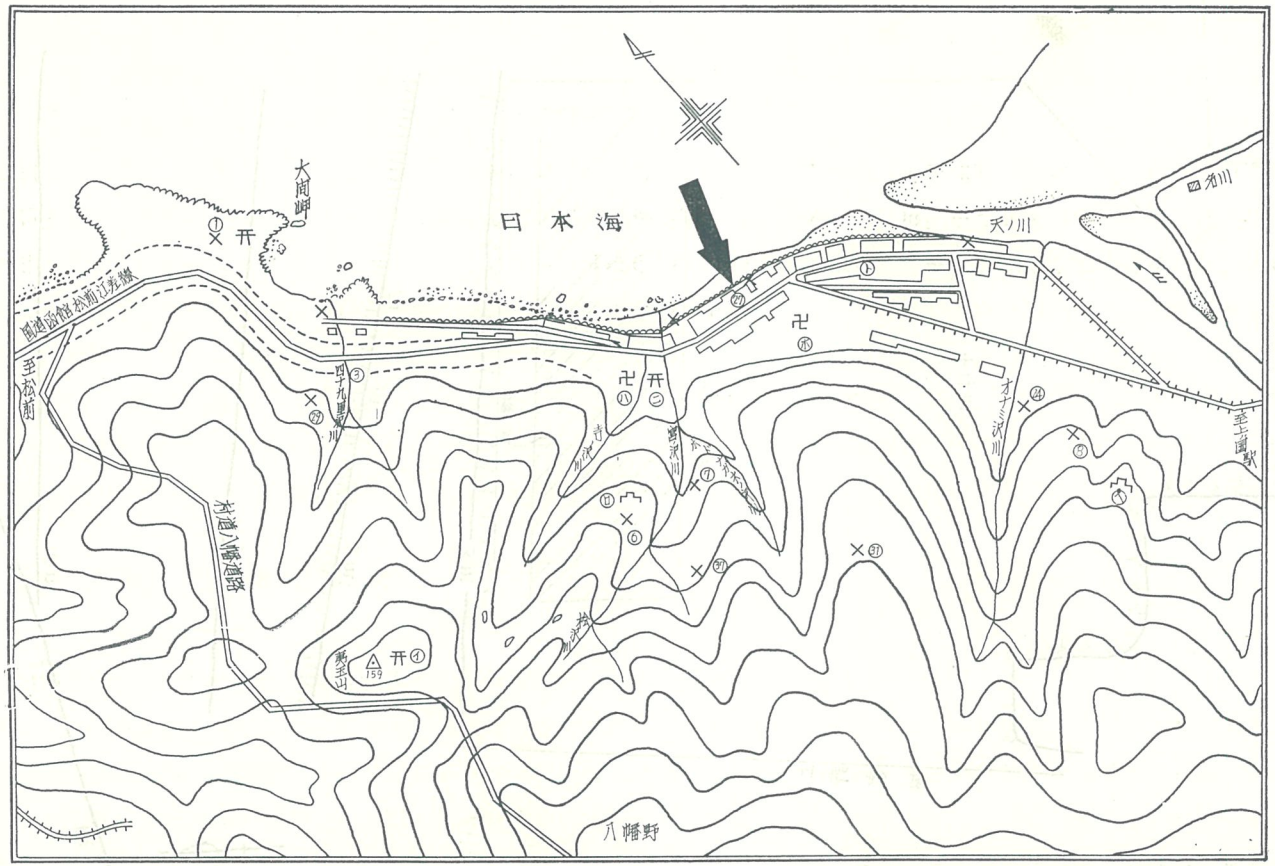
第二章　遺跡の状態

本遺跡は八幡野から発達した丘陵が海に突出した地点に当る。こゝを境に東すること一五〇米余で土地は低くなり、天の川沿いの平野となつている。また本遺跡前面の海は遠浅で海底に無数の岩石が存在するが、大澗湾寄りに水深は次第に大きい。すなわちこの地点は、かつて陸地が海中に相当に突出し、西北の大澗岬と相対して良湾を形成していたことが考えられる。大澗岬に対しこの東の突出点の基部に本遺跡が存在し、西北の突出点の大澗岬の基部と、大澗湾の凹部に当る上ノ国八幡宮の小川の川口とに同年代の遺跡が存在しているわけである。

その後、天の川が移動して川口が本遺跡の突出部に添うて開け、突出部を浸蝕し、更に波浪がこれを削つたので陸地が次第に減少し、今日の姿を呈したものと考えられる。上ノ国市街地には、かつて現在の国道のほかに本遺跡の辺りから東へもう一つの道があつて、道の北側で現在海になり、時には天の川の流れとなる辺りに、家屋や雑倉のあつたことを記憶している老人がいる。千石場所として賑わつた大澗湾の鰊漁業は、明治末年から没落したが、その頃から、ことに海水の浸蝕が著しかつたようである。村役場の土地台帳に照合してみても、これら海沿い及び川沿いの宅地は昔に比べ現在は著しく狭少になつている。

現在も天の川の河口は常に変遷しており、海中に砂州ができて、この遺跡の二、三米先が川になつたり、砂が堆積して十数米先までが砂浜になつたり、また累々たる岩石が遺跡の二・三米先に現われ、それを海波が洗つていることがある。こうした事情から推察すれば、本遺跡の遺物包含層の多くは既に潰滅し去つたものと考えられる。なお三四年九月台風の高潮によつて本遺跡は一層削られたが、三五年に災害復旧工事として護岸工事が施工されたが、護岸は低いので、海が大きく荒れる時には、波は護岸を超える状態である。

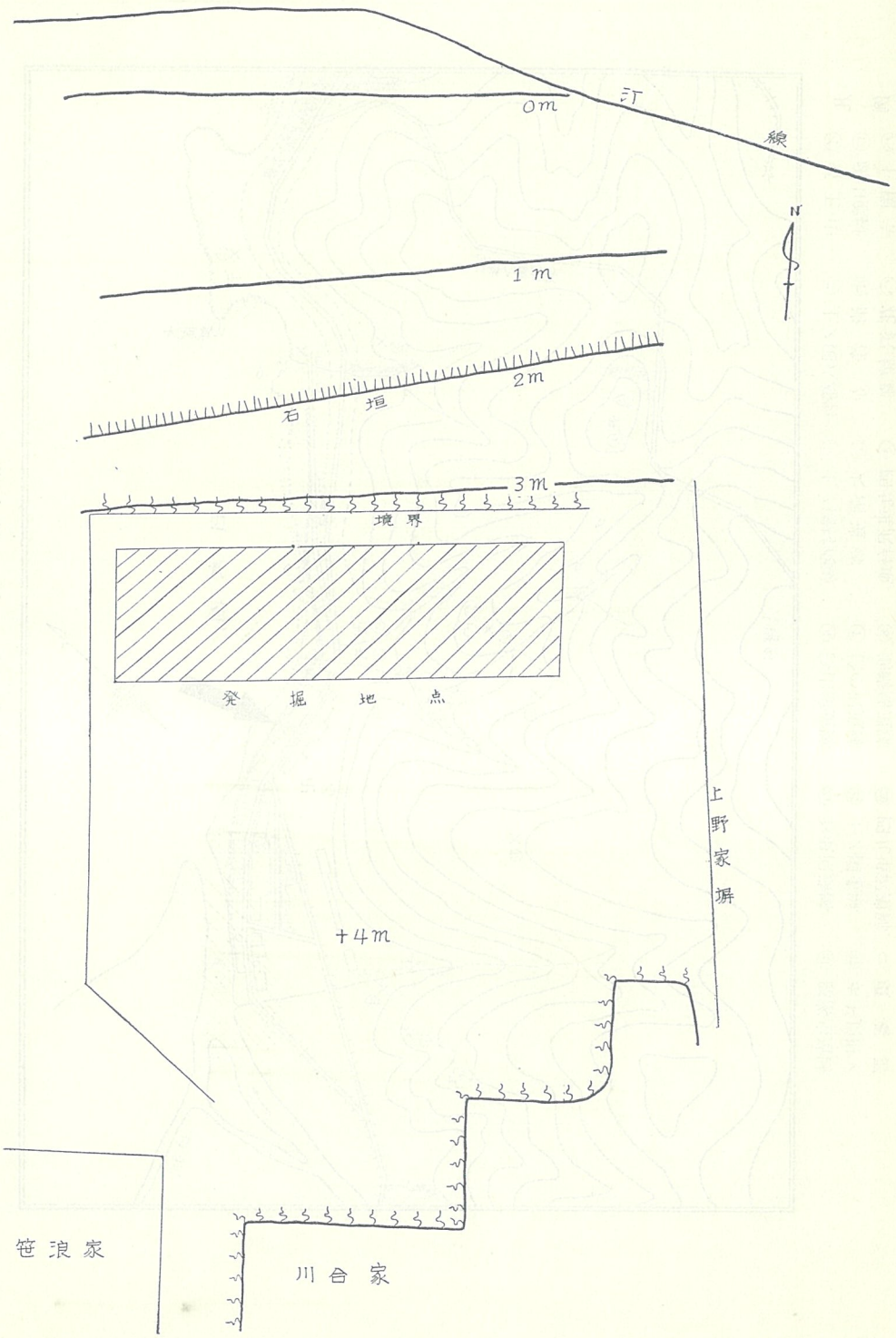
第１図　上ノ国遺跡略図



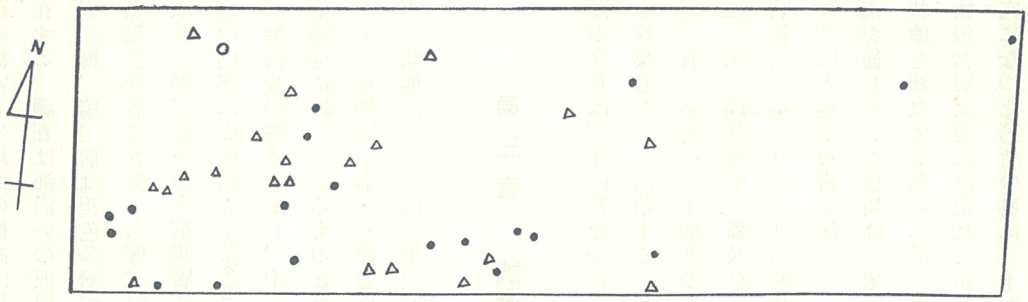
凡例

㋑ 夷王山	㋺ 上ノ国八幡宮	㋩ 上ノ国村役場	⑥ 勝山館遺跡	㉔ お浪沢遺跡	㉛ 部落畠遺跡
㋺ 勝山館趾	㋭ 清浄寺	① 大澗遺跡	⑦ 桧の沢遺跡	㉗ 上ノ国遺跡	㊲ ホド長根〃
㋩ 上国寺	㋬ 花沢館趾	③ 四九里沢台地	⑧ 蛎崎島遺跡	㉙ 四九里沢遺跡	⬭ 墳墓群

第 2 図　遺 跡 の 略 図

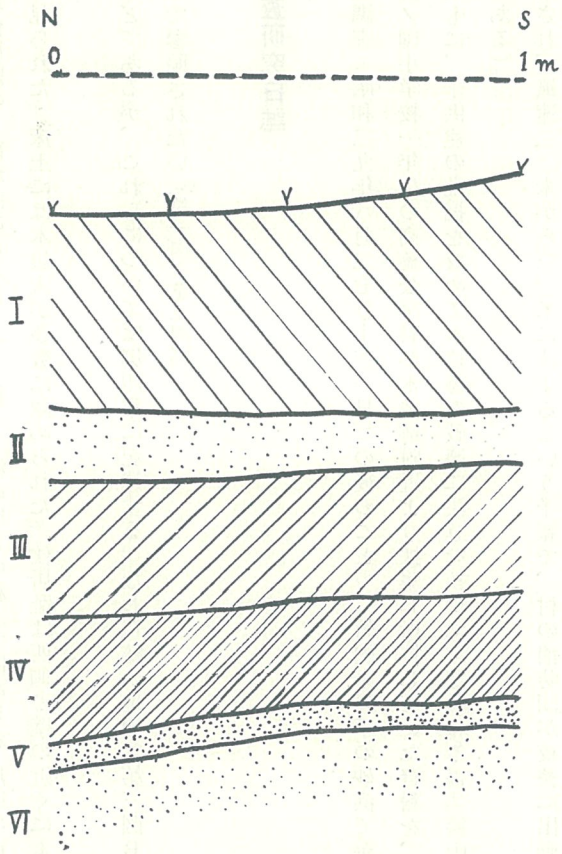


第 3 図 A　遺物の分布図



● 土 器　△ 石 器　○ 装身具

第 3 図 B　遺跡の地層図



I 褐色表土層　II 褐色砂層　III 茶褐色砂質土層
IV 黒色砂質土層　V 黒褐色砂層　VI 黄色砂層

本遺跡の海寄りの地点の標高は約三米であるが、山際に向い次第に高くなつている。遺物包含層は、現在幅凡そ一三米、奥行凡そ六―七米の間に存在する。調査は海沿いの仮堺に沿つて幅一〇米、奥行三米の区域を設定して行なつた。地層は上層より数えて、第一層は褐色表土層で二〇糎―五〇糎、第二層は褐色砂層で一五糎―二三糎、第三層は茶褐色砂質土層で二七糎―三三糎、第四層は黒色砂質土層で二三糎―五〇糎、第五層は黒褐色砂層で五糎―六糎、第六層は黄色砂層で基部まで続いている。

遺物は第一層、第三層―第四層に包含されていた。なお南側の壁の西端の近くでは、第三層と第四層の中間に幅一・五米の砂礫層が露呈した。また区画の内部に直径四・八五米の円形に近い平地住居趾の一部が認められた。床は約一〇糎の厚さの粘土で固められ、周囲に直径一〇糎前後、深さ二〇糎前後の柱穴を配し、中央部にも柱穴が見られた。床上には木炭末が多数に認められた。住居趾は西側の壁の近くにも拡大しており、区画外の隣地に続いているものと推定された。

各層出土の遺物は土器・石器並びに自然遺物などであるが、これらについては第四章に記述する。なお遺跡の地層は第三図Bに示し、土器、石器の出土状態については、第三図Aに示したので参照されたい（第一図―第三図）。

第三章　調査の経緯と調査研究日誌

本遺跡の発見は、先に行なつた大淵遺跡の発掘調査（昭和二九年八月二七日―三一日）の後のことで、竹内家裏手の砂浜で遊んでいた子供達が土器を採集したことに始まる。すなわち当時上ノ国小学校一年生の高橋公平君が本遺跡附近より採集し所持していた資料を、松崎がもらい受けたが、これら遺物の出土個所の確認を行うとともに、子供達の乱掘を戒めて本遺跡の破壊に注意を払つた（なお報告書「桧山南部の遺跡」第一一・一二図、浅鉢型の土器及び土器片がそれである）。

偶々昭和三〇年二月二〇日に風雪注意報が発令され、風速二〇米から三〇米に達するという予報で、村の消防団が夜警に出動した程で、ラジオはしきりに各地の被害を伝えていた。翌二一日風は次第におだやかになつたが、時々吹雪になつていた。こゝ数日来勝山館遺跡出土の土器の復原に夜を徹していた松崎は、衆議院議員選挙の立会演説に赴くために家を出たが、同演説会は翌二二日であることが判つたので、ついで暴風の被害状態を観察するために浜へ出て見た。漁業組合の下の波浪よけのコンクリート護岸が崩壊して車庫の端が空間にとび出しており、竹内屋敷の遺物包含層は波に打たれて新しい欠潰の跡が見られ、所々丸い穴があいて、土器破片が見えていた。また西隣りの笹浪氏宅裏の欠潰地の、少しく穴になつた箇所の奥に、土器破片がのぞいていたので、傍らの一、二片を拾い、大き目の石を二、三ケそこにあてゝふさいだ。また東隣

り屋敷の矢来も倒潰して雑倉が欠潰して崖の上にはみ出していた。翌日笹浪氏の了解をえて、先の石を除いて土器を取り出したが、本土器は丸型無文の土器であり、波がしみこんで凍つたせいか、ぼろぼろになつていた。幸い一かたまりであつたので、後に復原することができた。本資料が「桧山南部の遺跡」第一一図左下の壺形の土器である。

「桧山南部の遺跡」は、はじめ大澗遺跡調査の報告書を出すことで、上ノ国村教育委員会が企画したのであるが、これに上ノ国村内の遺跡の概要を加え、更に江差高等学校宮下教諭の調査した江差町の遺跡を加えることになり、上ノ国村教育委員会は江差町教育委員会に交渉して、両教育委員会の共同刊行ということになつたのである。本事情はさておき、三〇年四月北海道大学の大場は松崎宅に来泊して、大澗遺跡の報告書作製のための遺物の整理精査に当り、諸種の打合せをしたが、旧竹内屋敷遺跡の土器に注目し、型式不明の土器として、これの解明の機会を待つことにした。

これより先、松崎は昭和二六年秋、勝山館遺跡の一隅に顔を出していた土器の採集に手をそめ、出土した多くの遺物をかゝえて処置に窮していた。昭和二七年八月松平義人氏の仲介で明治大学文学部後藤守一教授の来村となり、松崎宅を根拠に夷王山墳墓群に科学のメスが加えられ、更に勝山・大澗・十兵衛沢等の仮調査がなされた。その時一行の中にいた吉崎昌一氏は翌年八月来村して、円筒文化の解明を志していた明治大学文学部考古学研究室の渡辺兼庸を松崎に紹介した。渡辺は二八年一〇月を松崎宅に過し、松崎と共に勝山や十兵衛沢の遺物遺跡と取り組んだ。二九年四月、関係遺跡である椴川や江差町茂尻遺跡の調査に当り、両人は乙部村姫川まで足を伸した。前肢があるといわれた鯨の化石の出土の端緒を掴んだのもこの時のことである。その後、東京大学東洋文化研究所に籍を置いた渡辺は、三三年佐藤達夫氏らと青森県六ヶ所村の遺跡調査に出張したが、その帰路である八月に上ノ国に来村して前記の遺跡の再調査を行つた。その結果は三四年、考古学雑誌第四四巻四号に松崎、渡辺両者名にて、「北海道椴川、勝山館、十兵衛沢遺跡」の報文を掲載することをえた。渡辺が上ノ国滞在中に竹内屋敷の欠潰点の地層を測り、海面との関係を見たりしたが、渡辺も本遺跡出土の遺物の編年に疑問を濃くしていた。本遺跡にはまだ相当量の遺物の埋蔵を確信されるものがあつたので、遺跡の破壊を警戒して、正式調査による解明の機会を待つていた。

その後本遺跡地帯は、年毎に欠潰を増していたが、ここは畑地として、水田の苗畑に使用され、秋に施肥して春は早く播種し、これが済んだ後は、野菜畑として使用されることが繰返されていた。三四年竹内家敷は川合政義氏によつて旧家屋が解体され、新築工事が始められたので、遺物包含地の半ばは放置されることになつた。愈々本遺跡調査の機会が熟し、幸い川合氏の発掘調査の承諾をうることができたので、松崎は本村教育委員会に調査の主体となることを懇請した。教育長中島勉氏は快くこれを承諾したので、直に北海道大学の大場に連絡した。大場は室蘭、女満別における調査に多忙を極めていたが、かねてこの日を期していたので直にこれに応じ、本遺跡の調査を八月初旬に決行することにし

た。村教育委員会も北海道大学医学部に依頼して大場派遣の承諾をえたので、文化財保護委員会へ正式調査の手続をとつた。折から渡辺兼庸は弘前市教育委員会の招きにより、岩木山麓遺跡調査（同年五月―一〇月末日）に赴いていたが、連絡により日程を割いてこれに参加することになつた。調査は八月三日より、同六日まで行われた。発掘作業には村教育委員会の職員のほかに、上ノ国中学校長沢田誠氏に協力を依頼し、同校生徒十余名が出動した。調査の状況はつぎの如くである。

調　査　日　誌

八月一日（土）曇

発掘諸準備を行う。竹べら作り、遺物箱（果物の空箱）一五ケを購入、平板計測器、ポール、荷札、新聞紙、紙袋、小箒等を整える。夜、弘前から渡辺兼庸が来宅する。

八月二日（日）曇

本日も発掘諸器具の整備を行い、村教育委員会布施潤一郎次長に発掘調査時の写真撮影を依頼し、上ノ国中学校に協力方について連絡して発掘準備を終る。夜、渡辺と松崎は大場を上ノ国駅に迎え、松崎宅で発掘調査の打合せを行う。

八月三日（月）晴

輝く朝の日ざしを浴びて、スコップ、移植べら、弁当持参の中学生達が、早くから松崎宅前に集まる。八時出発して現場に向う。

照りつける日ざしに輝く遺跡地の眺めは又となく美しい。北海道の歴史に夜明けをよんだ上ノ国の地である。松前藩創業の歴史の故を以て北海道文化財に指定され、円筒文化の遺跡として知られている勝山館趾の鮮かな木々の緑に、北海道最古の木造建造物として、道文化財指定の上国寺本堂の赤い屋根が映え、夷王山が静かにこれを見おろしている。早期の遺物を蔵してはり出す大澗岬に抱かれる紺碧の海の色、天の川口からの砂浜の向うにつづく、追分の江差の町なみに、水平線をかぎつて弯曲してつゞく住時の西蝦夷地の熊石、久遠の山々が青くかすんで大澗岬に迫り、奥尻島も望見される。

（参加者氏名）

大場、松崎、渡辺並びに上ノ国村教育委員会教育長中島勉、同次長布施潤一郎、上ノ国村役場笹浪甲衛、上ノ国中学校教諭瀬川和夫の各氏、上ノ国中学校生徒簗瀬伊佐雄、草間俊彦、城戸斉、上野広、愛場一充、稲積篤、前田昭彦、森茂信、小林信之、若山忍、若山栄子、熊谷順子、

工藤藤子の諸君。

遺物包含地の中の海寄りの地域に、長さ一〇米、幅三米の区劃を設定して発掘にかゝる。渡辺は中学生を指導して遺跡の実測にかゝる。遺物係、記録係などの分担を決める。

発掘作業は進行し、第一層表土の剥離から第二層、更に第三層に及び、土器破片がしきりに出土する。午後南側の壁すれ〳〵にほゞ完形の小型の深鉢形土器一ヶが出土する。午後五時作業終了する。

夜出土の土器破片の中から数片を選んで水洗する。

八月四日（火）晴

上ノ国八幡宮の林にミン〳〵蟬が鳴きはじめ、照りつけて暑さきびしいが、遺跡地は海を渡る微風が快く、さ程苦痛を感じない。掘り上げた土砂は山となつて、教育長中島氏や、写真係を担当する布施氏までその整理にスコップを振う。

第四層西隣地寄りの地区からしきりに土器が出土して皆を緊張させるが、完形らしいものは見当らない。南よりの壁に砂礫層が現われる。昨日からの平地住居趾は柱穴などとともに完全に姿を現わしたので実測図をとる。教育委員会の川合政義氏（地主）も来援する。渡辺は岩木山麓調査の都合で一先ず弘前に帰ることになり、終列車で上ノ国を辞する。

八月五日（水）晴

第四層剥離作業を継続する。住居趾の下層には土器が少なく、土器は専ら住居趾と隣地の間で出土する。遺物は南寄りの地区の奥に続いて埋蔵されているように推定される状態である。

三日からこの方、作業班の中学生は三時になると、川合氏宅の縁側に腰をかけたり、その辺の日蔭に屯して、教育委員会からのパンやアイスキャンデイを食べて少憩する。中学生達は一日中係員の指示に従つてよく働くので感激する。また沢田校長は連日作業場に現れ、熱心に見学し生徒達に無言の激励を与えていた。五時過ぎ作業を終る。本日を以て今回の発掘作業は終了する。

八月六日（木）晴

発掘埋めもどし作業を行う。教育委員会から人夫をもらいその完全を期した。朝から中学生数名が、松崎宅の庭の池に会して土器水洗を行なう。慶応義塾大学江坂輝弥氏来宅し、大場らの案内で発掘地点を視察する。出土の遺物について意見を交し、松崎保管の遺物を調べて写真を撮影する。午後教育委員会差廻しのハイヤーで、大場、江坂氏、布施教委次長、松崎は、夷王山、八幡野を経て大崎に廻り、遺跡の視察をする。（遺跡、史跡の豊かなこの辺りは、夷王山史跡群と名付けられた地であり、昭和三五年指定されて北海道立桧山自然公園となつた景勝地でも

ある)。午後、江坂氏が昨年仏領印度支那を視察された折の幻燈スライドを見学する。これには発掘調査に参加した中学生を始め、近所の人達も集まり、松崎宅の広座敷で興味深く観覧し、説明に耳を傾ける。終つて教育委員会主催の慰労会が開かれ、大場、松崎のほか、江坂氏、沢村々長、中島教育長、布施次長、沢田校長らが出席する。

八月七日（金）晴

一番の列車で大場並びに江坂氏退村する。松崎は中学生有志とともに土器の水洗と、調査の後かたづけを行なう。

八月八日（土）晴

本日も中学生有志が集まつて土器の水洗を行う。松崎は発掘遺物の整理を継続する。

研究日誌

八月十日、渡辺兼庸は再び来宅し、同一三日帰弘するまで、土器の整理と研究を行なう。なお松崎は同一一日から夏祭りが始まり、九月末まで多忙を極めたが、一〇月に入つて連日土器の整理を行なう。

一〇月二十一日、爾志郡明和小中学校に佐藤邦夫校長を訪ねる。同氏らの案内で同日三ツ谷岬に小貝塚を発見する。ここは昨年秋の台風十四号に洗われて貝層が露出して白くなつており、上ノ国遺跡出土の土器と類似の土器破片を発見する。

昭和三六年二月一九日、上の国村教育委員会の招きにより大場来村し、同二二日まで松崎宅において遺物を精査し、報告書刊行の準備を行なう。大場、松崎を始め、教育長中島勉氏、同次長布施潤一郎氏、同委員会森兼雄氏らが手伝う。

本報告書は上ノ国村並びに上ノ国村教育委員会殊に教育長中島勉氏、同次長布施潤一郎氏の特別な計らいと、熱心な推進により刊行される運びになつたが、ここに筆者一同皆様の御厚意に対し感謝致します。

第四章　出土の遺物

本遺跡より出土した遺物は、土器、石器、装身具などの人工遺物と、動物骨格、貝殻などの自然遺物である。なお土器は第一層より擦文式、須恵器などが少数出土しているが、第三層及び第四層よりは縄文晩期のいわゆる亀ヶ岡式土器の系統のもので、大洞B、B－C、C_1といわれる

時期のものが出土している。また石器、装身具、その他の遺物はすべて第三層―第四層出土品である。これらについてその大略を述べればつぎの如くである。

Ⅰ　第一層出土品

本遺跡の第一層出土の遺物は擦文式並びに須恵器であるが、これらはすべて破片のみである。その数は擦文式土器口頸部破片一〇片、体部破片四〇片の計五〇片と、須恵器底部破片一ケ、体部破片一ケの計二片で、総計は五二片である。これらの土器破片によつて、本式土器の特徴をあげればつぎの如くである。

（擦文式土器特徴）　胎土に砂粒を含み、焼成温度高く茶褐色をなす。厚さは比較的薄く硬い。形態は深鉢形、浅鉢形が見られる。深鉢形土器は口頸部が強く外反した形態のものが多い。口縁は水平口縁で底は平底である。大いさは大小あるが、大なるものでは高さ三〇糎位のものがある。文様は器面全体に整調痕様の擦痕が見られるほかに、口頸部並びにその附近にのみ、刻線及び短刻線を並行して数条印刻される刻線文が見られる。本遺跡出土の擦文式土器を本道北部地帯に見られる擦文式土器に比較しての差異は、文様が単純で、その殆んどが口頸部に施文され、体下部には見られないことである。

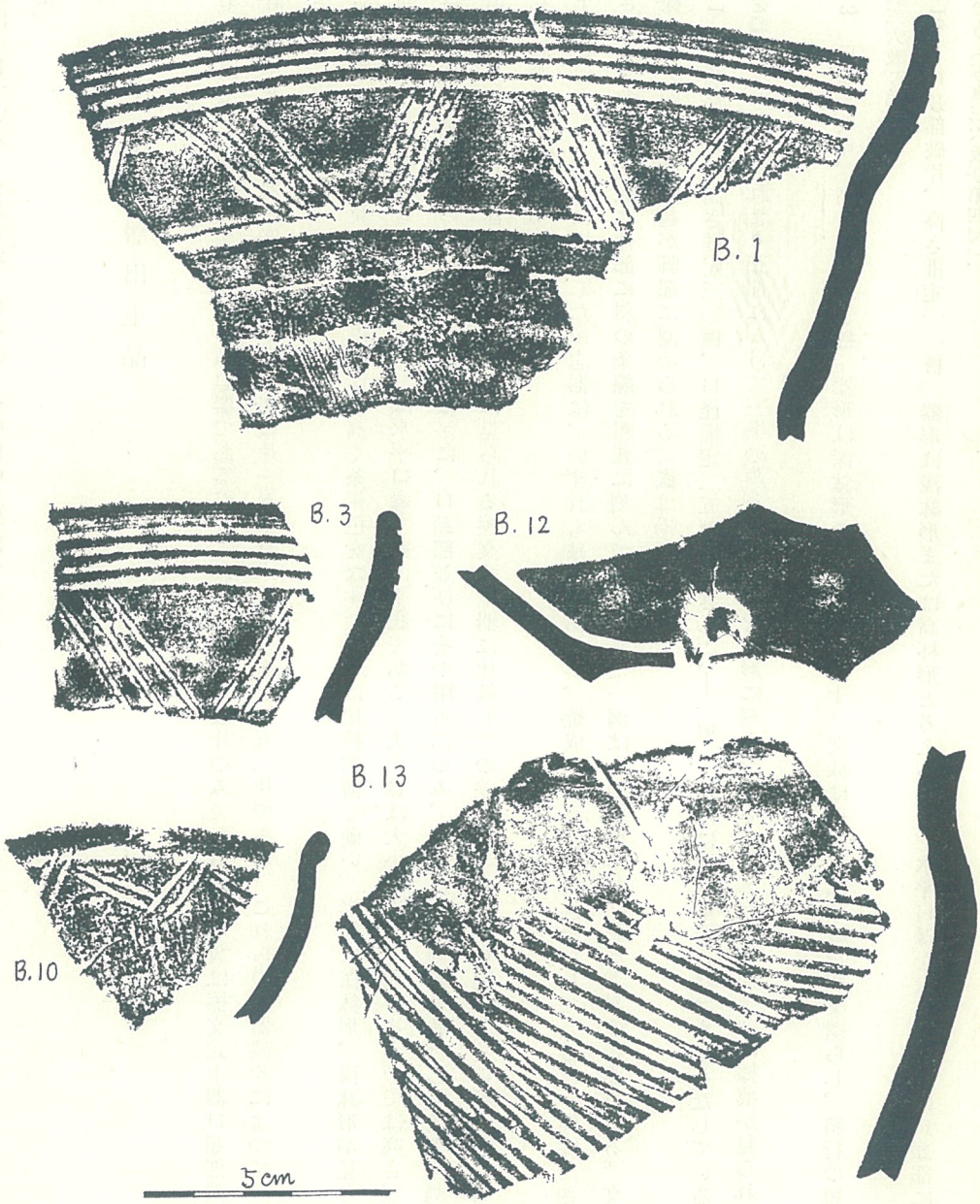
また本式土器と混合して同時に出土した須恵器は、いずれも破片であるが、焼成温度高く、灰色をなしている。一例は高さ三〇糎以上の甕形土器と推定されるもので、文様は体部に斜の条線を粗雑に刻んでいる。また一例は小型甕形または壺形土器の底部である。文様らしいものがないが、標識様の一ケの瘤状の突起が脚部に認められる。底は揚底である。

例1　B.1　口頸部破片、高さ推定三〇糎、口径推定二五糎、厚さ〇・八―一糎。器形は深鉢形で口縁は水平をなしている。文様は口頸部に四条の刻線を環しており、それより頸部にかけて三条の斜行の短刻線を山形に刻んでいる。地文的に体部全面に擦痕が見られる（写真三六及び第四図）。

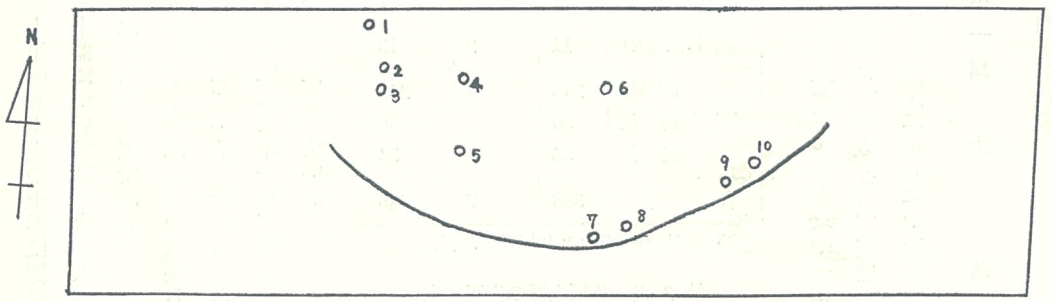
例2　B.3　口頸部破片、高さ推定二〇糎。器形は深鉢形で水平口縁をなす。文様は口頸部に刻線を四条環らし、斜行の短刻線を山形に刻んでいる（写真三六及び第四図）。

例3　B.10　口頸部破片、高さ推定一〇糎。器形は浅鉢形または高杯形と考えられる。水平口縁をなし、文様は口頸部に二条の短刻線を山形に刻んでいる（写真三六及び第四図）。

第 4 図　第一層出土の擦文式土器並びに須恵器



第5図　住居遺構



（註）　床面は＋2.92m.　柱穴（○）1＝－9cm.　2＝－12cm.　3＝－28cm.　4＝－10cm.　5＝－11cm.
6＝－24cm.　7＝－20cm.　8＝－24cm.　9＝－14cm.　10＝－8cm.

例4　B.12　須恵器、底部破片、厚さ〇・三糎。器形は甕形または壺形と思われる。底は揚底である。焼成温度高く、硬度も高く、厚さは薄い。轆轤を以て整形され、底は糸切り底である。文様は見られないが、脚部に一ケの突瘤が見られる（写真三六及び第四図）。

例5　B.13　須恵器、頸胴部破片、高さ推定三〇糎、厚さ〇・八―一糎。器形は甕形と思われる。焼成温度高く、硬度も高く、厚さは薄くない。文様は体部に条線文を斜に並行して粗雑に施文されている（写真三六及び第四図）。

Ⅱ　第一層上の住居遺構

第一層剥離作業中に区画内に住居遺構の一部が発見された。土地の都合で、これを拡大追究することはできなかつたので、その全貌は明らかでないが、つぎのことが確認された。

形態は直径推定四・八五米前後で円形に近い。竪穴的な壁は有していない。床上は厚さ六―一〇糎の粘土で固められており固い。円形の輪郭の内部の辺縁に沿つて比較的整然と柱穴が排列されているが、内部にも見られる。発見された柱穴は比較的小で、直径一〇糎前後の円形のものが多く、深さは八糎―二八糎前後である。床上には焼土と無数の木炭末が認められる。なお床面の高さは現汀線より＋二・九二米である。遺物は本住居と関連した確実なものは見られない。

上述の如く住居の構造、位置などから推察すれば、本住居の構築された年代は、第一層から出土した擦文土器文化期に近いものと思われるが、擦文文化期と決定しうる関連は見だせない。従つて本住居趾は擦文文化期乃至それ以降に構築された平地住居趾と考えられる（第五図）。

Ⅲ　第三層―第四層出土品

第三層―第四層出土の土器は縄文晩期の土器のみで、その他のものは混在していない。土器はいわゆる亀ヶ岡式土器といわれるものである。亀ヶ岡式土器については、東京大学理学部人類学教室山内清男氏の研究によつて、大洞B、B―C、C1、C2、A、A'の六型式に細分されていることは衆知の事実である。

本遺跡出土の土器は上述の大洞B、B―C、C1式といわれているものが、その大部分を占めているが、本型式の範疇に入らない種類の土器もこれと併存している。なおこれらの土器についての層位関係については、遺憾ながら本遺跡では確認することができなかつたので、今仮に主体文様を基礎にして第一類、第二類、第三類、第四類の四種に分類して記述する。なお厳然と各類に分類し難いものもあるが、これらはより近い特徴のものに含めている。

第1表　観察土器の数

出土品			番外	合計
復原したもの		11	2	13
破片	口頸部	243	5	248
	胴部	30		30
	底部	54		54
合計		338	7	345

(註) 番外は隣接地より採集したもの

第2表　各類土器の出現頻度

型式	第一類	第二類	第三類	第四類	合計
深鉢形	138	26	53	42	259
浅鉢形	12	7	18	33	70
皿形	1			1	2
壺形	1	4	5	3	13
注口形				(1)	(1)
合計	152	37	76	80	345

(註) (　)内の土器は隣接地より採集した番外品、深鉢形と浅鉢形は区分できないものもある。

出土の土器の数は、復原しえたもの一三ケ(番外二ケを含む)、破片約一三四〇ケであるが、これらのうち資料として観察したものは、復原しえたもの一三ケ、口頸部破片二四八ケ、胴部破片三〇ケ、底部破片五四ケの合計三四五個体である(第一表参照)。またこれらの資料の各類土器の出現頻度は第一類土器は深鉢形(やや完形三ケ、破片一三五ケ)一三八ケ、浅鉢形(やや完形一ケ、破片一一ケ)一二ケ、皿形一ケ、壺形(破片)一ケの計一五二ケである。第二類土器は深鉢形(破片)二六ケ、浅鉢形(破片)七ケ、壺形(破片)四ケの計三七ケである。第三類土器は深鉢形(やや完形一ケ、破片五二ケ)五三ケ、浅鉢形(破片)一八ケ、壺形(不完形一ケ、破片四ケ)五ケの計七六ケである。第四類土器は深鉢形(破片)四二ケ、浅鉢形(やや完形四ケ、破片二九ケ)三三ケ、皿形(破片)一ケ、壺形(やや完形一ケ、破片二ケ)三ケ、注口形(破片)一ケの計八〇ケである(第二表参照)。各類土器について詳述すればつぎの如くである。なお主要なものについては写真一五―三五に示し、拓本も第六図―第一九図に示したので参照されたい。

第一類土器

(第一類土器特徴)

器形は深鉢形、浅鉢形、壷形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上を規則的に押刻して刻目を施しているもの、口縁上に山形の小突起を二―三ケ一組で数ケ所に対称的に施しているものなどがある。底は大多数は揚底であるが、稀には丸底のものも見られる。また浅鉢形では台付のものも見られる。器形の出現頻度は深鉢形が非常に多い。文様は地文として比較的繊細な斜行縄文が全面に附されているが、このほかに主として口頸部附近に竹管様用具を押刻してつくつた爪型文を一―数列平行して環状に整然と附され、これが主体文様をなしている。なお爪型文は底部にも一―数列平行して附されるものも見られる。爪型文の形態には細身のもの、半月形のもの、楕円形のものなどが見られ、また施文によつて器面が浮文様に隆起しているものも見られる。なお小型の土器では地文だけのものも見られる。

例1　A.2　やや完形、深鉢形、高さ一五糎、口径一三・五糎、底径六・二糎、厚さ〇・五―〇・七糎。器形は口径と底径の長さの差がない深鉢形で、口縁は水平をなしている。底は揚底である。文様は地文として斜行縄文が全面に見られる。口頸部には整然と並行した三列の爪型文を環している（写真一五及び第六図）。

例2　A.5　やや完形、深鉢形、高さ一七・三糎、口径一一糎、底径八糎、厚さ〇・五糎。器形は筒形に近い深鉢形で口縁は水平である。底は丸底に近い。文様は地文として斜行縄文が見られる。その他は口頸部にわずかの爪型文が見られる。また口縁上には全縁に刻目が見られる。（写真一五及び第六図）。

例3　A.15　やや完形、深鉢形、高さ一〇・五糎、口径一〇・二糎、底径三糎、厚さ〇・三糎。器形は底径の小さい深鉢形で、揚底である。口縁上には二ケ一組の小突起が認められる。文様は地文として斜行縄文が見られる。その他では口頸部に二列の爪型文が整然と見られる（第七図）。

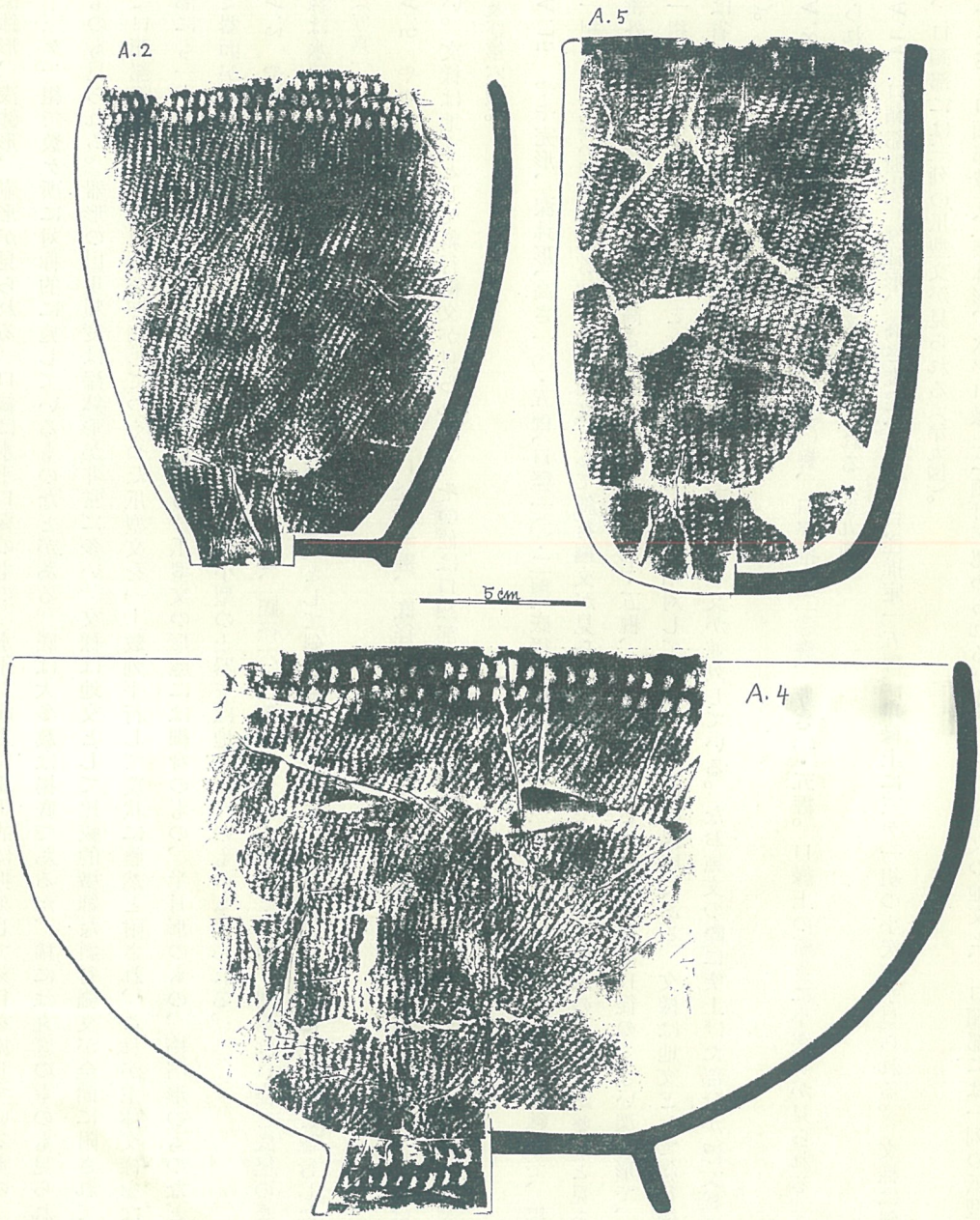
例4　番外1　やや完形、深鉢形、高さ二四・七糎、口径二七・五糎、底径八糎、厚さ一糎。器形は口径の大きい深鉢形で、口縁上には山形突起三ケが一組（一ケは大で二ケは小）となつて、六―七ケ所に相対して見られる。底は揚底である。文様は地文として斜行縄文が見られるが、脚部附近は省略されている。口頸部には比較的整然と二列の爪型文が並列している。なお施文の際に突上げた部分が浮文様に見える（写真一七及び第八図）。

例5　A.8　口頸部破片、深鉢形、高さ推定二〇糎、口径推定二〇糎、厚さ〇・五糎。口縁上の所々に小突起が見られる。文様は地文の斜行縄文が見られ、口頸部には二列の爪型文が認められる（第九図）。

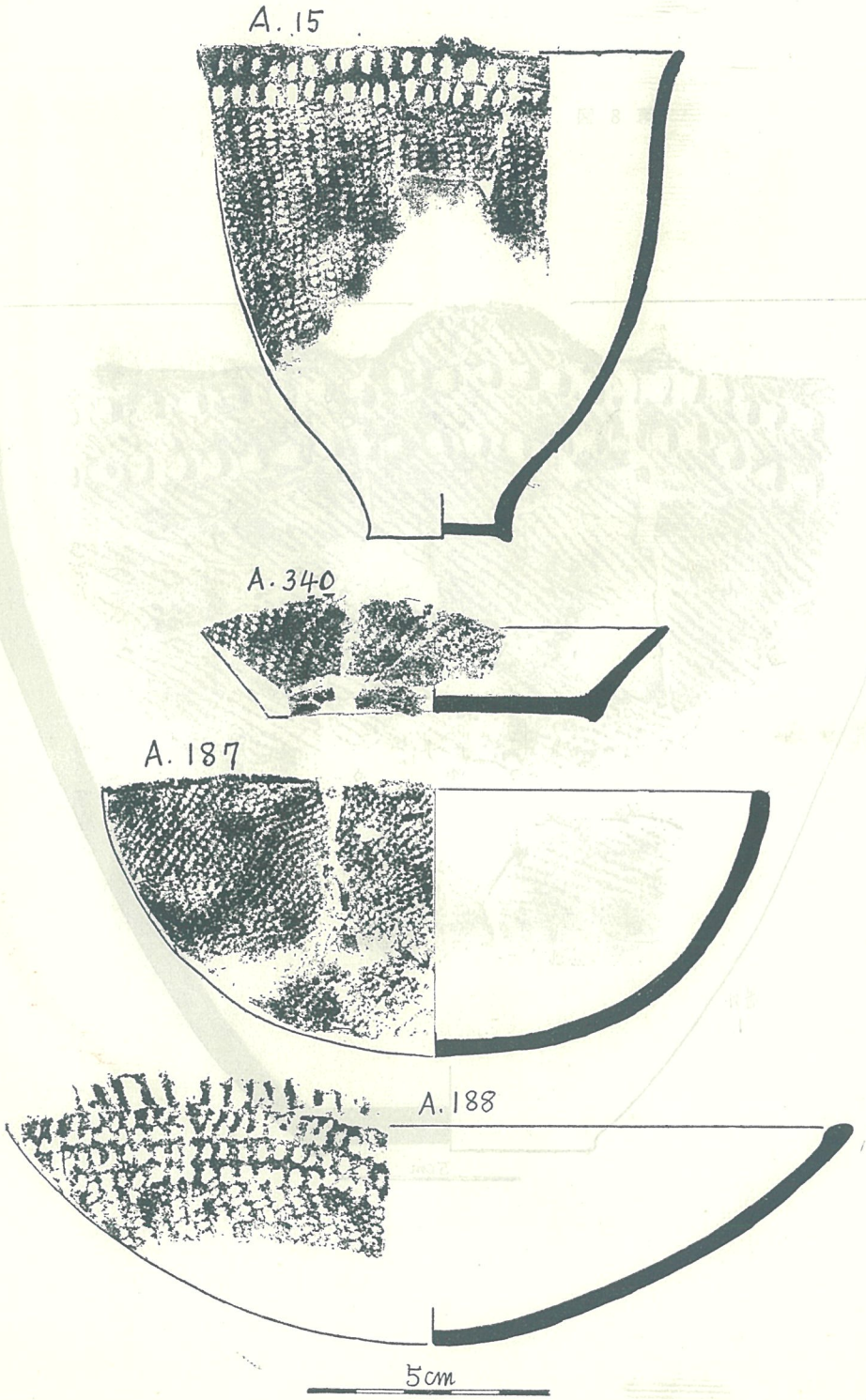
例6　A.14　口頸部破片、深鉢形、高さ推定一五糎、口径推定一五糎。口縁上に三ケ一組の小突起が見られる。文様は斜行縄文が地文として附され、口頸部には三列の爪型文が見られる（第九図）。

例7　A.249　口頸部破片、深鉢形、水平口縁上に刻目が認められる。文様は斜行縄文の地文と、口頸部には一列の爪型文が見られる（第九

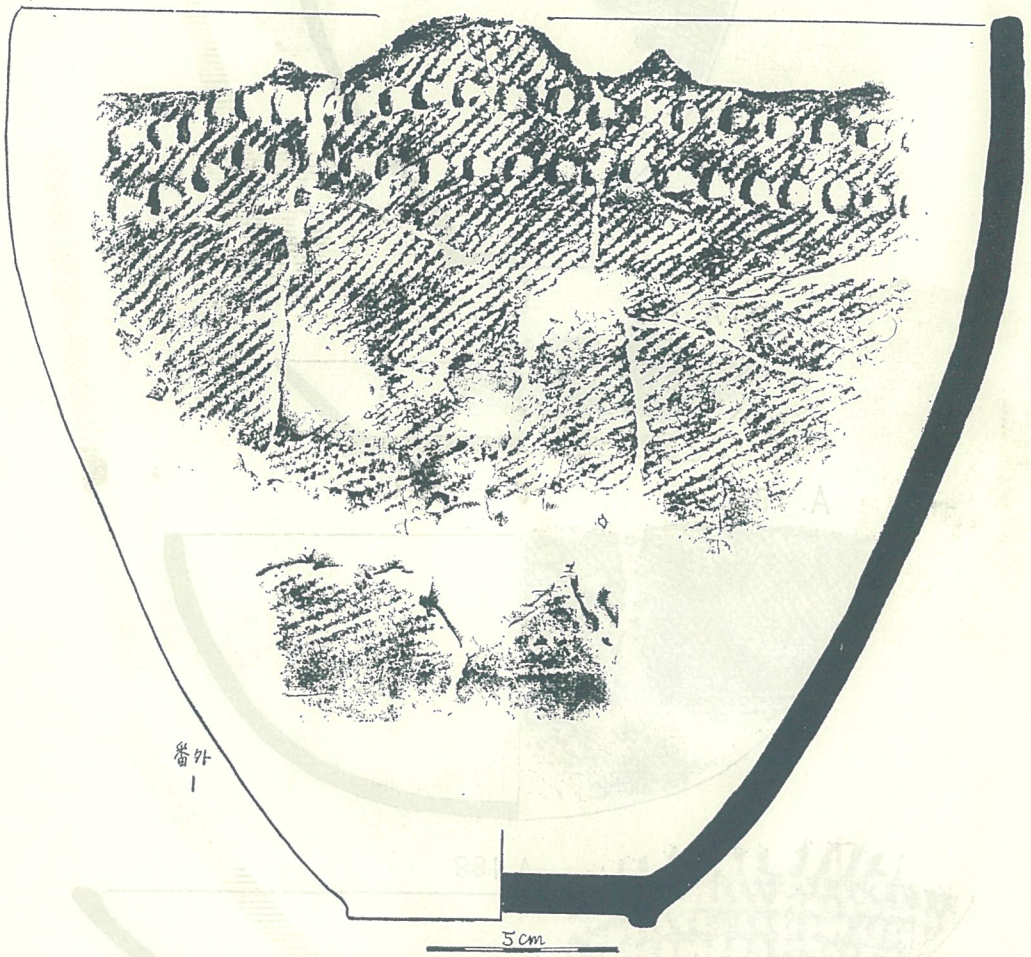
第 6 図　第3－4層出土　第一類土器 1



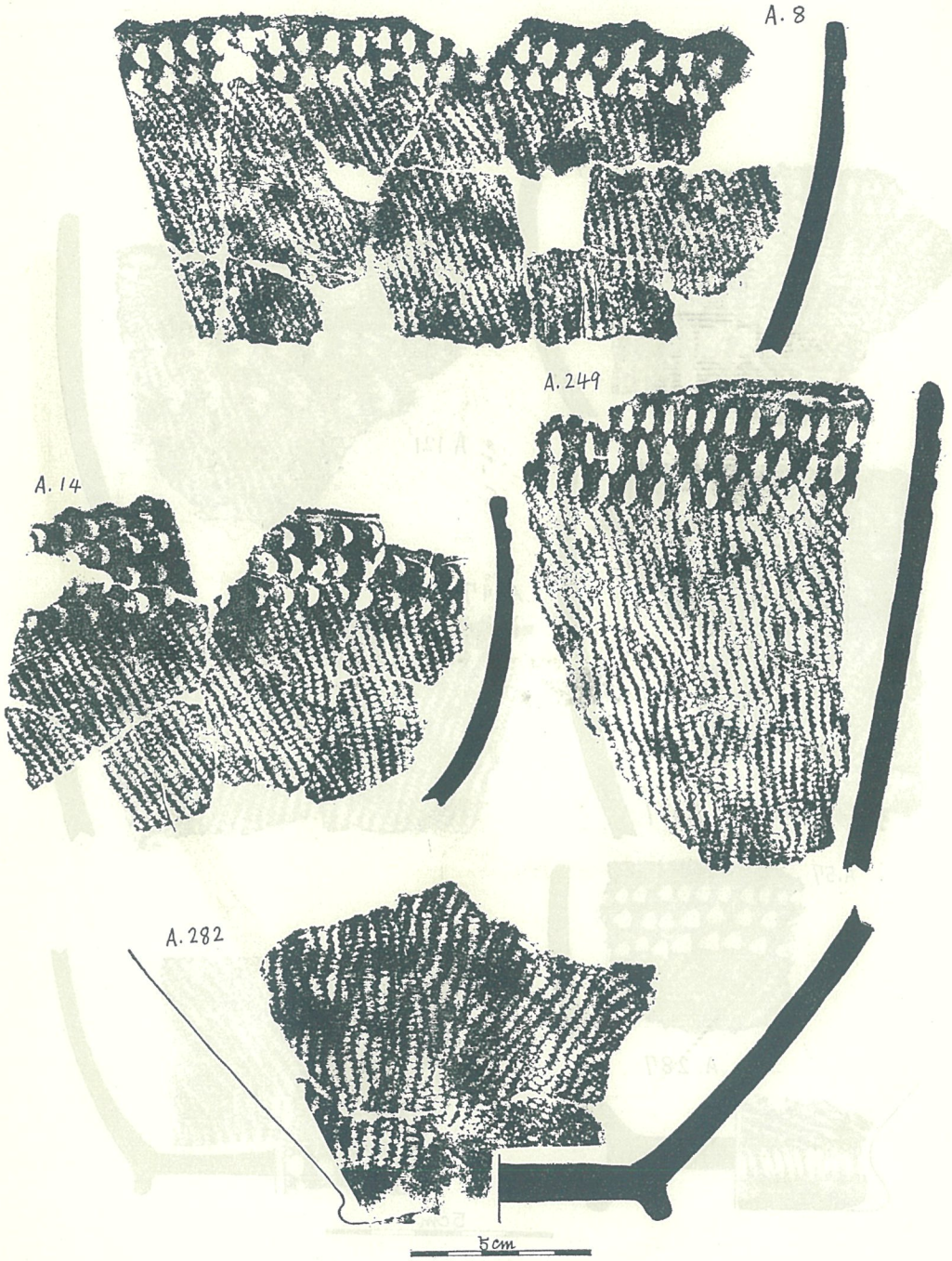
第 7 図　第3—4層出土　第一類土器 2



第 8 図　第3―4層出土　第一類土器3



第 9 図　第3－4層出土　第一類土器4



第 10 図　第3－4層出土　第一類土器5

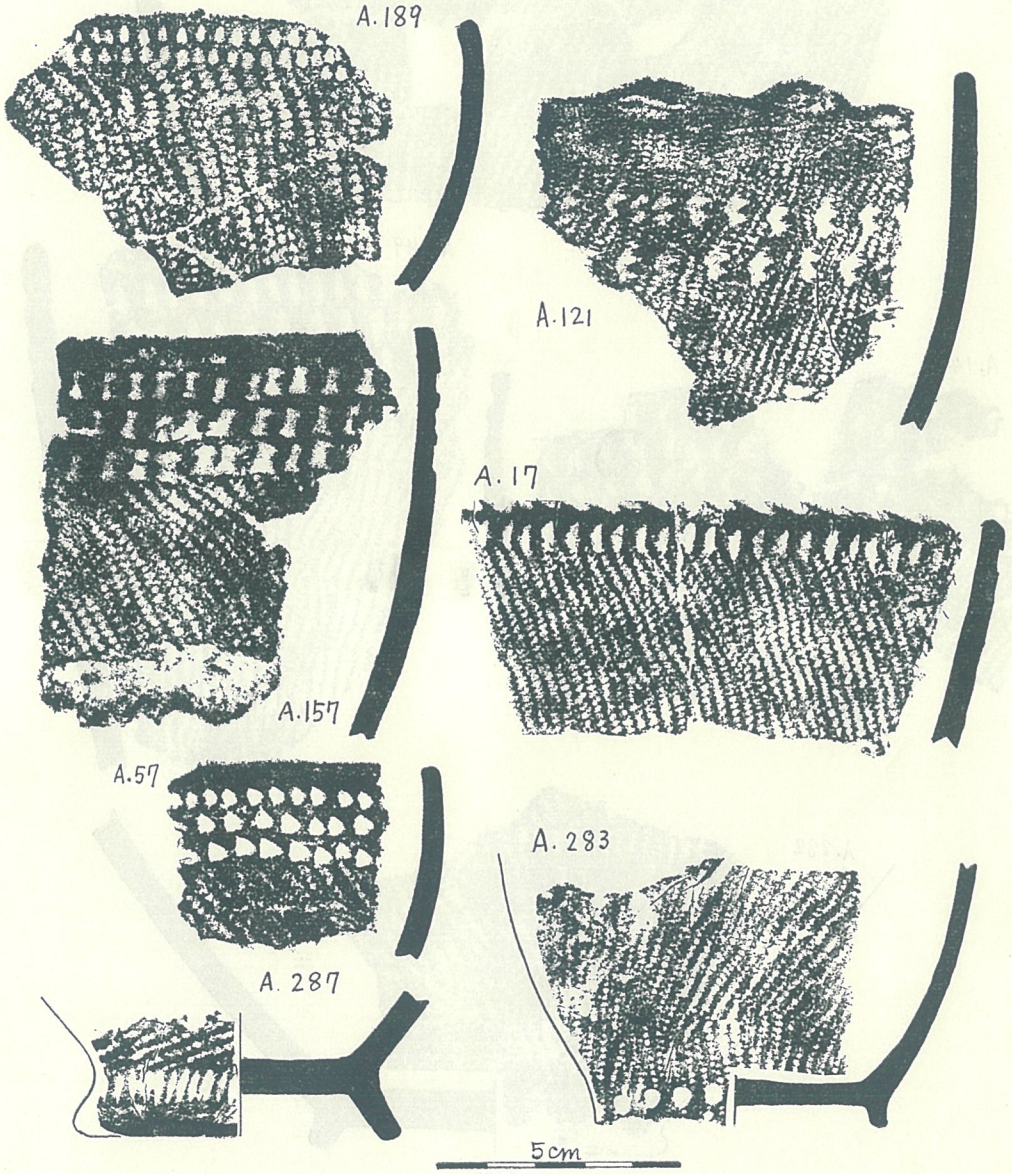


図)。

例9　A.157　口頸部破片、深鉢形、水平口縁をなす。文様は地文の斜行縄文と口頸部には三列の爪型文が見られる(第一〇図)。

例10　A.121　口頸部破片、深鉢形、口縁上に二ケ一組の山形突起が認められる。文様は斜行縄文の地文と、頸部には二列の爪型文が見られる(第一〇図)。

例11　A.4　やや完形、浅鉢形、高さ一七・五糎、口径三〇糎、厚さ〇・七糎。器形は台付の浅鉢形をなし、口縁の所々に小突起が見られ、突起上に刻目が認められる。文様は地文として斜行縄文が全面に見られる。また口頸部には二列の爪型文を環している。なお底部にも二列の爪型文が見られる(写真一六及び第六図)。

例12　A.187　やや完形、浅鉢形、高さ五・五糎、口径一四糎、厚さ〇・五糎。器形は浅鉢形、丸底である。口縁は水平で、文様は地文として斜行縄文が器の全面に見られる。本例は地文だけの例である(第七図)。

例13　A.188　やや完形、皿形、高さ四・七糎、口径一七・八糎、厚さ〇・五糎。器形は皿形、丸底である。口縁は水平をなすが、口縁上には刻目が認められる。文様は地文として斜行縄文が全面に見られる。また口頸部には三列の爪型文を整然と環している(第七図)。

例14　A.340　やや完形、皿形、高さ二糎、口径九・八糎、底径七糎、厚さ〇・三―〇・五糎。器形は皿形、揚底である。口縁は水平である。文様は地文の斜行縄文だけが器の全面に施文されている(第七図)。

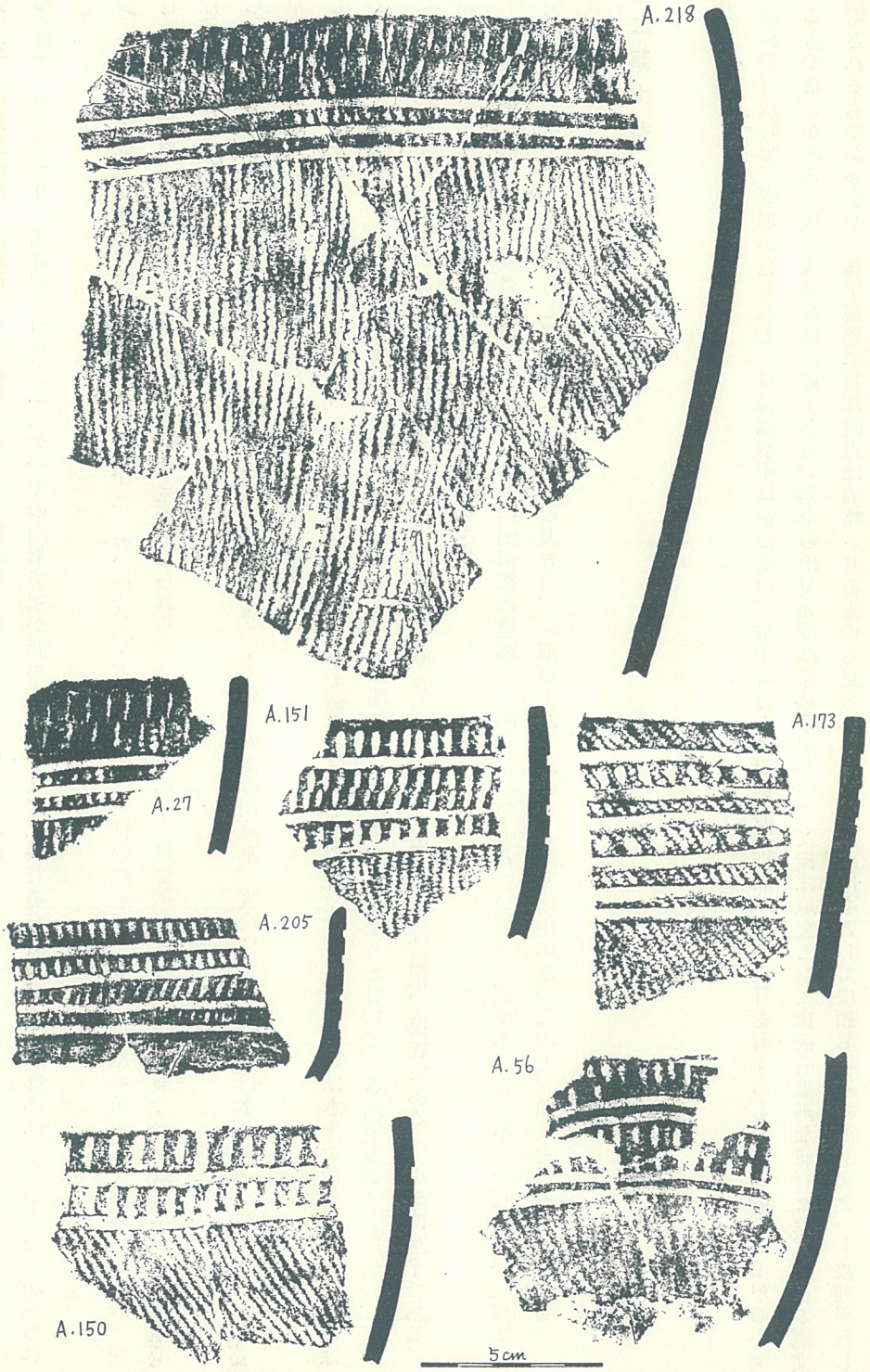
(訂正)　本類の資料について、筆者らが先に報告した「桧山南部の遺跡」(昭和三〇年七月)の第一〇頁の本文と、第一一頁の第一二図に、型式不明で前期の土器と思われると記載したが、今回の調査で、晩期の土器であることが明らかになったので、前文をここで訂正する。

第二類土器

(第二類土器特徴)

器形は深鉢形、浅鉢形、壺形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上に規則的な押圧による刻目を有するもの、口縁上に山形の小突起を有するものなどがある。底は大多数は揚底である。器形の出現頻度は深鉢形が多い。文様は地文として比較的繊細な斜行または縦行の縄文が全面に附されるものが多いが、体下部殊に脚部附近は省略されるものも見られる。このほかに主として口頸部附近に爪型文を一―数列平行して環状に附され、更に爪型文の上下に刻線を一―数条環らしており、爪型文と刻線文(直線文)が主体文様をなしている。爪型文の形態は爪型

第 11 図　第3—4層出土　第二類土器



のものと、刻点様に変化したものとが相半ばしている。

例1　A.218　口頸胴部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなすが、口縁上には刻目が認められる。文様は地文として縦行に近い縄文が見られる。口頸部には二列の爪型文と、その直下に三条の刻線文が見られる。爪型文と刻線文が分離して施文された例である（第一一図）。

例2　A.150　口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行縄文が地文として附され、口頸部には二列の爪型文と、二条の刻線文が交互に施文されている（第一一図）。

例3　A.205　口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行縄文が地文として附され、口頸部には四列の爪型文と四条の刻線文が交互に施文されている（第一一図）。

例4　A.173　口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行縄文が地文として附され、口頸部には二列の爪型文が、六条の刻線文の中に囲まれて施文されている（第一一図）。

例5　A.151　口頸部破片、深鉢形、口縁は水平口縁をなす。文様は斜行縄文が地文として附され、口頸部には四列の爪型文と、三条の刻線文が配合施文されている（第一一図）。

例6　A.56　頸胴部破片、深鉢形、文様は斜行縄文の地文と、口頸部には四列の爪型文と五条の刻線文が配合施文されている（第一一図）。

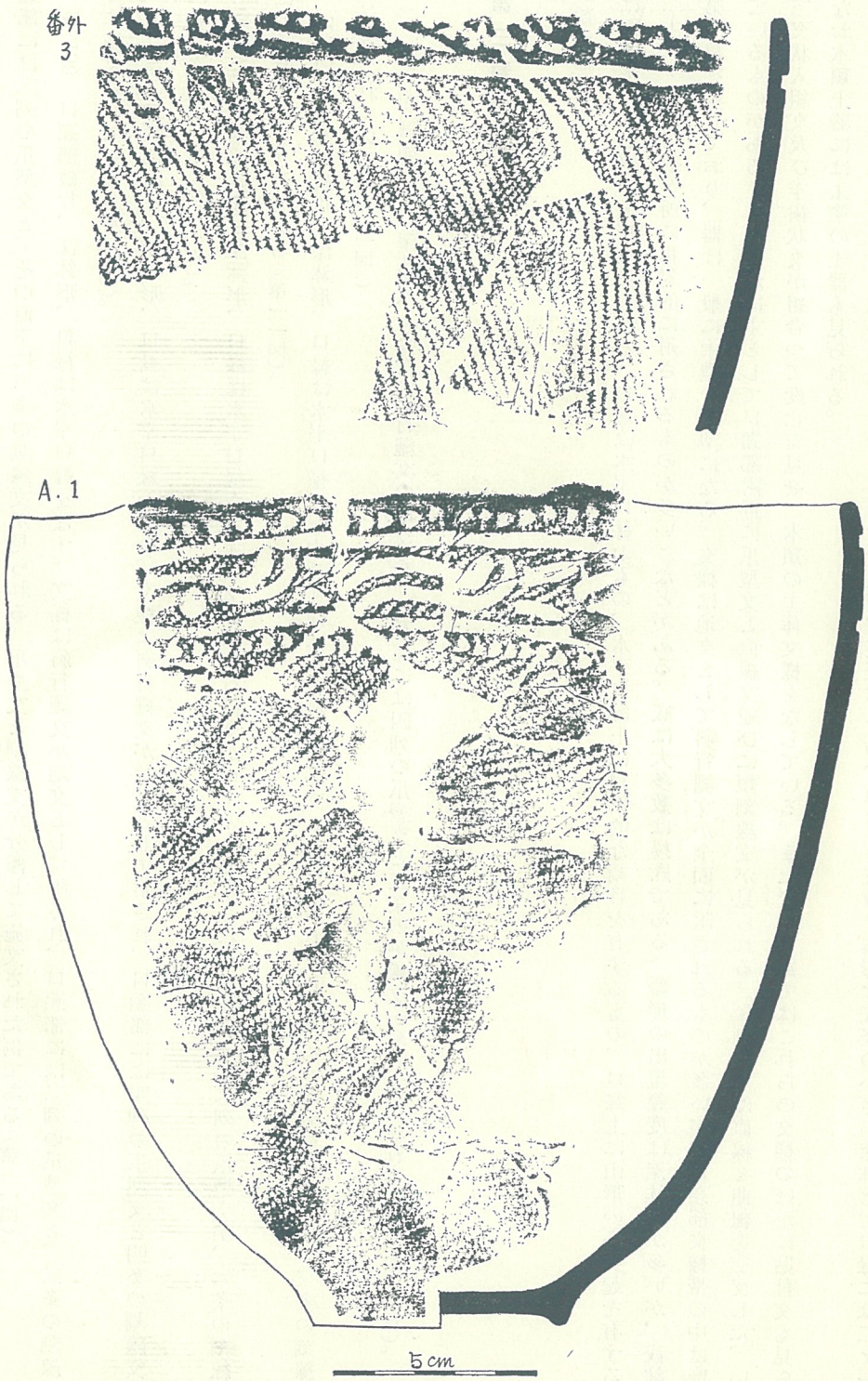
第三類土器

（第三類土器特徴）

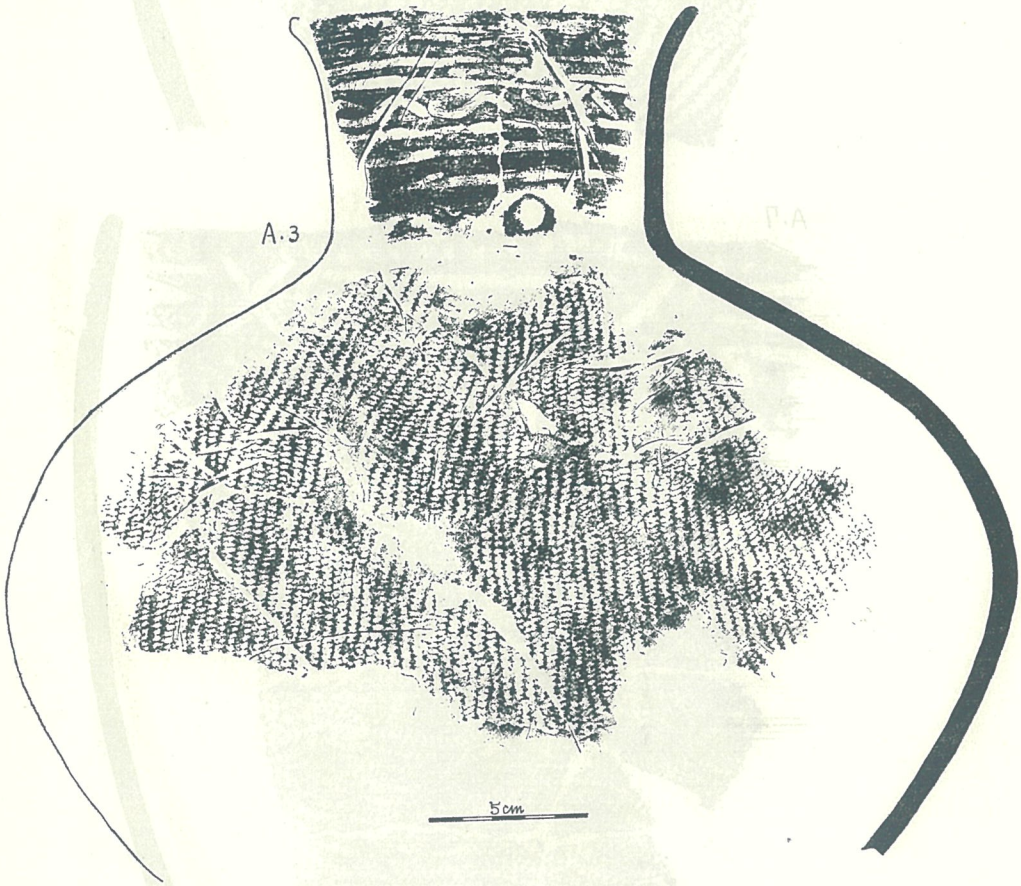
器形は深鉢形、浅鉢形、壺形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上に規則的な刻目を有するもの、口縁上に山形の小突起を有するもの（二―三ケ一組で数ケ所に相対的に附されるものが多い）などがある。底は大多数は揚底である。器形の出現頻度は深鉢形が多いが、浅鉢形も次第に数を増しており、器は一般に中型―小型になる。文様は地文として斜行縄文が全面に附されるものが多いが、口頸部文様帯の中は磨消されているものがある。このほかに主として口頸部附近に爪型文と直線文並びに短刻線文が見られる。短刻線文は直線と曲線を交叉した、いわゆる三叉状入組文及び羊歯状文が組合つて変化を見せ、本類の主体文様をなしている。また壺形土器ではこれらの文様のほかに貼付文も見られる。なお本類土器には朱塗の土器も見られる。

例1　A.1　やや完形、深鉢形、高さ二〇・八糎、口径二一・五糎、底径六・五糎、厚さ〇・五糎。器形は底径の小さい深鉢形で口縁には二ケ一

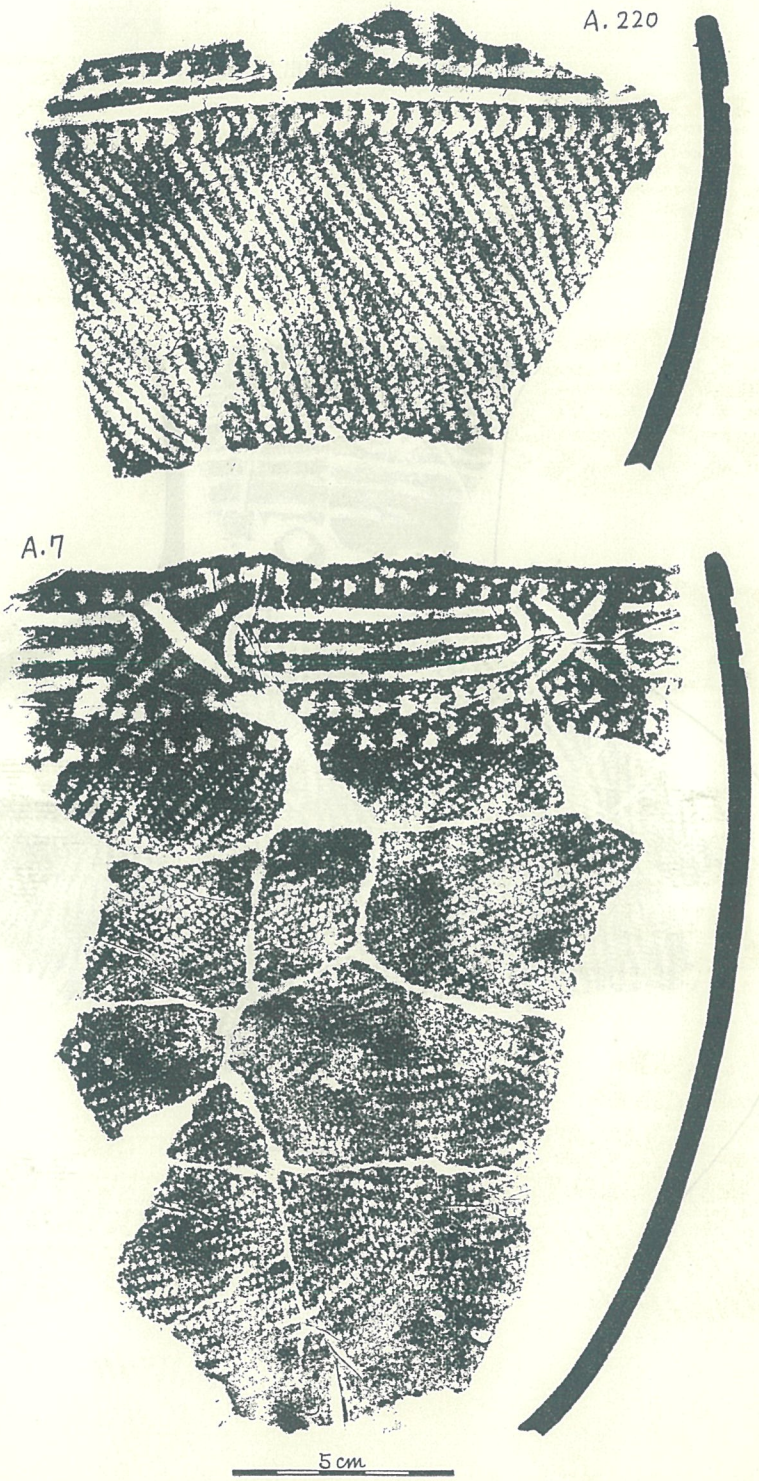
第 12 図　第3—4層出土　第三類土器1



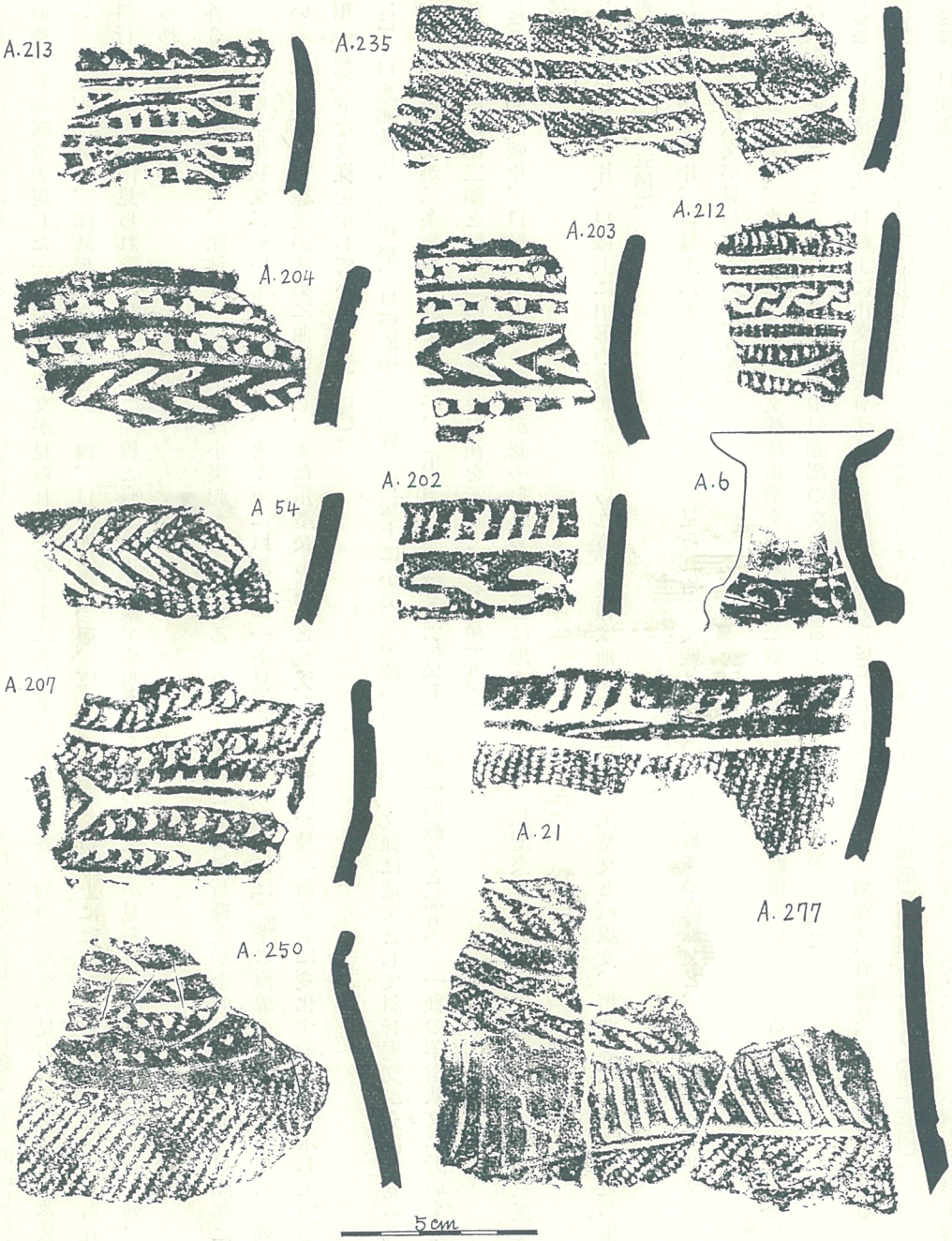
第 13 図　第3—4層出土　第三類土器2



第 14 図　第3—4層出土　第三類土器3



第 15 図　第3—4層出土　第三類土器4



組の小突起が数ヶ所に対称的に見られる。突起の上には刻目が認められる。底は揚底である。文様は地文として斜行縄文が全面に見られる。口頸部には曲線と直線の短刻線で表現した一種の羊歯状文が見られ、その上下に各一条の刻線文と各一列の爪型文が見られる(写真一九及び第一二図)。

例2　A.7　口頸胴部破片、深鉢形、高さ推定二〇糎、口径推定二〇糎、厚さ〇・五糎。口縁上には二ヶ一組の小突起が認められる。文様は地文として斜行縄文が全面に見られる。口頸部には曲線と直線の短刻線で表現した一種の三叉文が見られ、それを囲んで上に一列、下に二列の爪型文が見られる(第一四図)。

例3　番外3　口頸胴部破片、深鉢形、口縁上には小突起が認められる。文様は地文として斜行縄文が全面に見られる。口頸部には短刻線と爪型文を混じた一種の羊歯状文に近いものが見られ、その下に直線文が一条見られる。口頸部には二条の直線文を囲んで上下に二列の爪型文が施文されているが、上部の直線文が次第に曲線化し、また爪型文も曲線と交叉して次第に一種羊歯状文に変化する様態を示している。本例は第二類と第三類の過渡的な文様を示している(第一二図)。

例5　A.21　口頸部破片、深鉢形、口径推定一四糎。口縁上に小突起が認められる。文様は地文として斜行縄文が全面に見られる。口頸部には爪型文が一列と直線文が二条施文されているが、爪型文と直線文は交叉して次第に曲線文となり、一種の羊歯状文に近いものになっている。本例も前例と同様に第二類と第三類の過渡的な存在を示している(第一五図)。

例6　A.207　口頸部破片、口縁上に山形の突起が認められる。文様は地文のほかに、爪型文と短直線文を配合した一種の三叉文をなしている(第一五図)。

例7　A.212　口頸部破片、口縁上に山形の突起が認められる。文様は地文のほかに、爪型文と直線文、短曲線文でつくった羊歯状文などを配合して多彩である(第一五図)。

例8　A.213　口頸部破片、口縁上に刻目があつて起伏が見られる。文様は地文のほかに数条の直線文と、短曲線文と爪型文の交叉によつてつくられた一種の羊歯状文が見られる(第一五図)。

例9　A.204　口頸部破片、水平口縁をなす。文様は爪型文の変化した刻点文と直線文、短直線を以てつくる羽状文を巧に排列している。本例の文様帯は次例(A.203)とともに、壺形土器の口頸部の文様帯であるように推察される(第一五図)。

例10　A.203　口頸部破片、口縁上に小突起を有する。文様は前例(A.204)と殆んど同様で、刻点文、直線文、短直線文からなる(第一五図)。

例11　A.54　口頸部破片、口縁は水平である。文様は地文のほかに、短直線の羽状文を口頸部に囲繞している(第一五図)。

例12　A.202　口頸部破片、水平口縁をなす。文様は爪型文、直線文、短曲線文を排列した一種の三叉文に近い。本例も壺形土器の口頸部文

様帯であるように思われる（第一五図）。

例13　A.3　やや完形、壺形、高さ推定二八糎、口径一二・八糎、頸部長さ七・五糎、腹径三一糎、厚さ〇・四―〇・七糎。口縁は水平をなす。文様は口頸部と体部に分れ、体部には全面に斜行縄文が地文として附されている。口頸部には短曲線で構成する一種の三叉文が見られ、それを囲んで上に二条、下に三条の直線文が見られる。また頸部に直径一―一・三糎の円形の貼附文が九ヶ所に見られる（写真二〇及び第一三図）。

例14　A.6　口頸部破片、壺形、口径五糎、厚さ〇・五糎、口縁は水平をなす。文様は頸部に渦状の曲線文が認められる。また頸部に貼附文も見られる。なお本例はいわゆる朱塗土器で器面に朱が認められる（写真三五及び第一五図）。

例15　A.211　胴部破片、本例は小破片のみであるが、器面に朱が認められるもので、朱塗土器である（写真三五）。

例16　A.250　口頸胴部破片、壺形、口縁は水平である。文様は口頸部と体部が異り、体部には斜行縄文が見られる。口頸部には二列の爪型文と二条の直線文と短曲線文が配合して見られる（第一五図）。

第四類土器

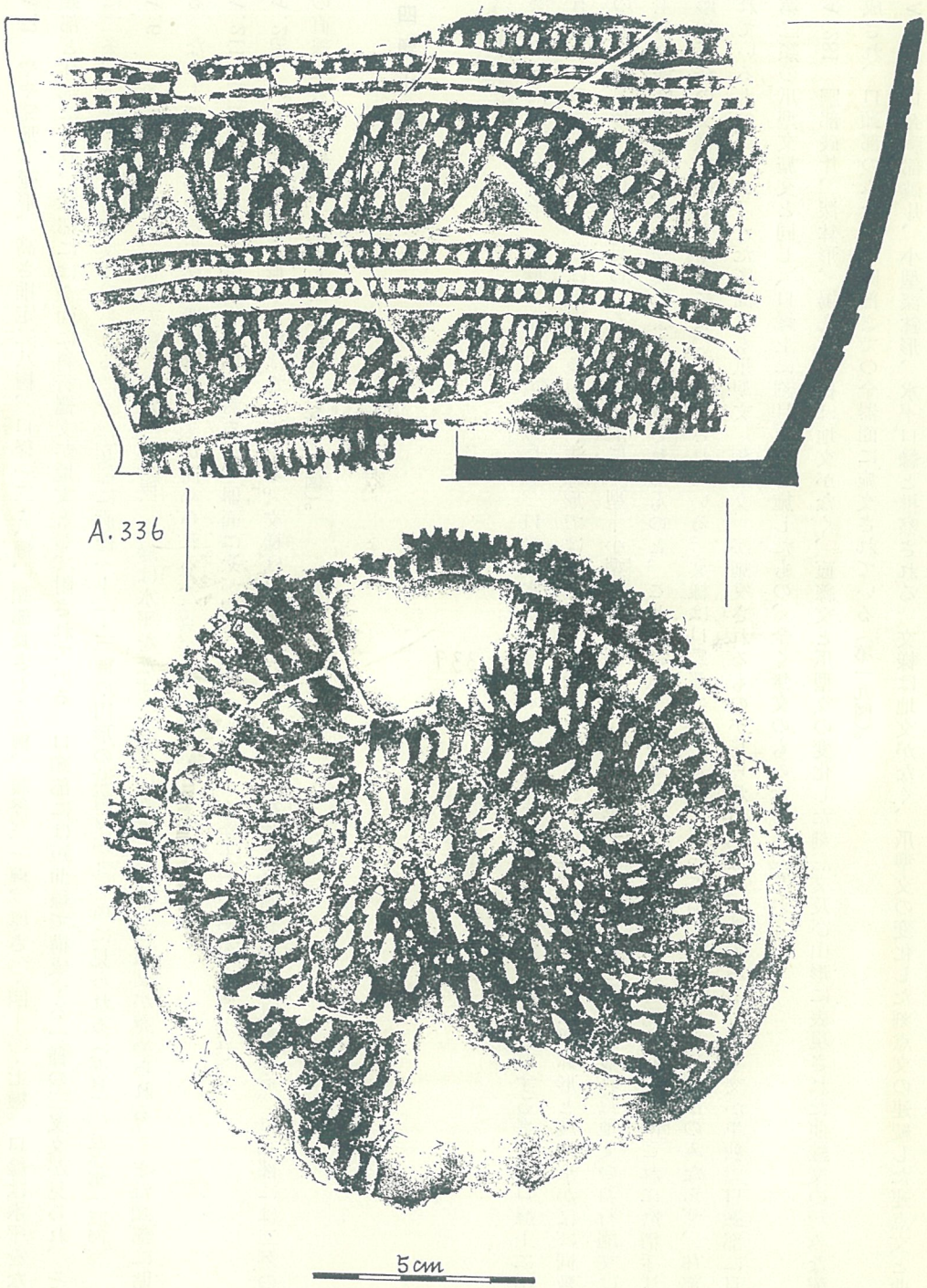
（第四類土器特徴）

器形は深鉢形、浅鉢形、皿形、壺形、注口形が見られる。口縁は水平口縁のもの、水平口縁上に規則的な刻目を有するもの、口縁上に山形の小突起を有するものなどがある。底は揚底が多いが、浅鉢形では丸底、平底なども見られる。器形の出現頻度は深鉢形と浅鉢形がほぼ同数であり、壺形のほかに皿形、注口形も見られる。器は一般に中型―小型のものが多い。文様は第一、第二、第三類に見られた地文の斜行縄文は殆んどない。主体文様は直線と曲線の交叉によつて構成されるものと、これらに爪型文の変化と見られる刻点文を配合し、更にこれに磨消手法による浅い浮彫的手法の文様を配したものによつて構成されている。文様は口頸部のみのものも見られるがすくなく、口頸部のみならず、体部の全面に施されているものが多い。また底面にも爪型文（刻点文）が施文されるものが見られる。なお少数であるが爪型文が単独で口頸部に見られるもの（第二類の爪型文施文と同じ）、口縁上に刻目だけを施したもの、全く無文のものなども見られる。

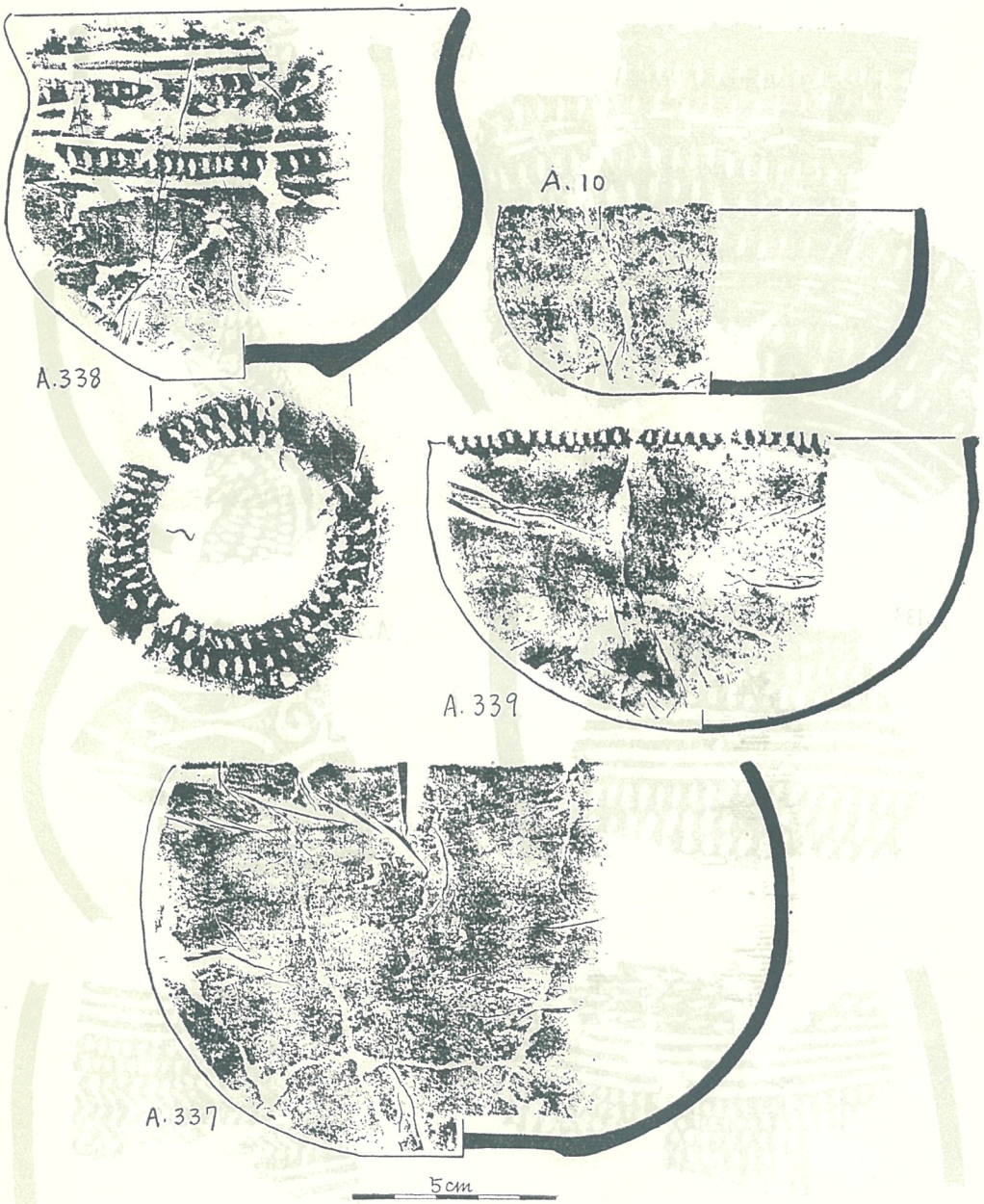
例1　A.281　胴部破片、深鉢形、揚底。文様は地文がなく、直線文と爪型文の変化した刻点文及び山形に表現された曲線文の巧みな配合によつて構成され、口頸部のみならず脚部までの全器面に施文されている（第一九図）。

例2　A.210　口頸胴部破片、小型深鉢形、水平口縁と推察される。文様は地文がなく、爪型文の変化した刻点文の連続した連点文と曲線文

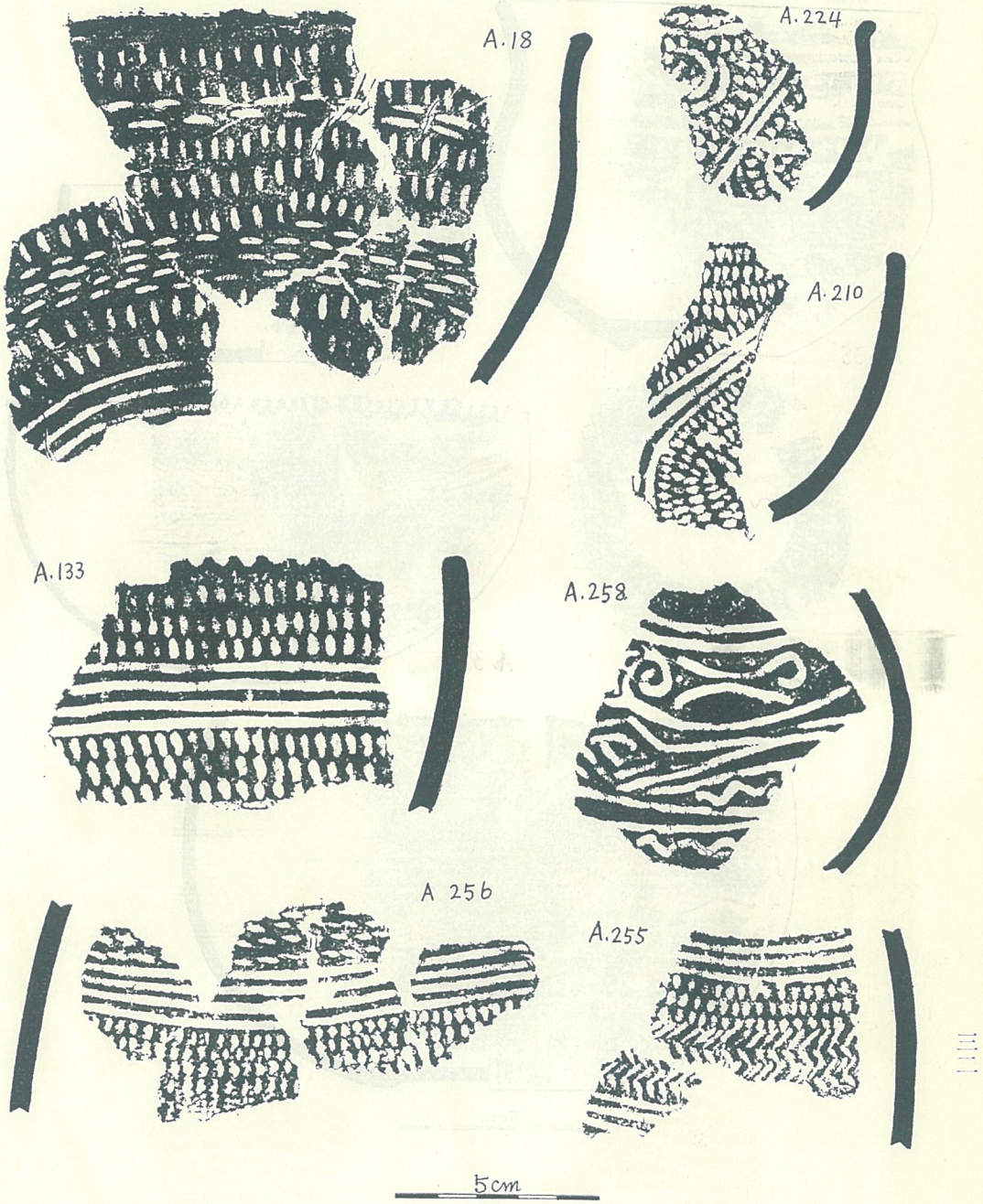
第 16 図　第3—4層出土　第四類土器1



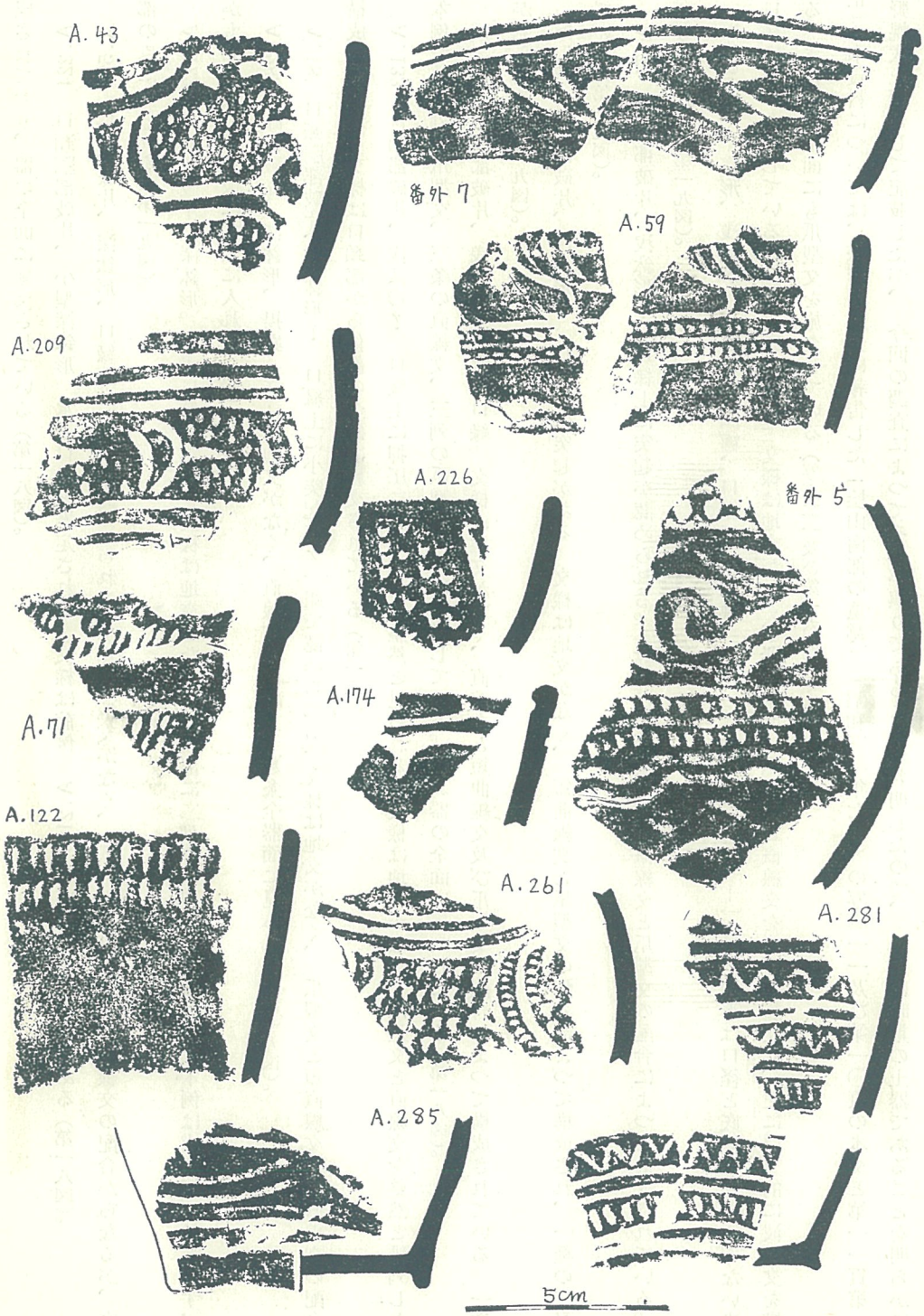
第 17 図　第3—4層出土　第四類土器2



第 18 図　第3—4層出土　第四類土器3



第 19 図　第3—4層出土　第四類土器4



とで構成されており、器の全面に施文されている（第一八図）。

例3　A.224　口頸胴部破片、小型深鉢形。水平口縁と推定される。文様は前例（A.210）とほぼ同様の表現である（第一八図）。

例4　A.59　口頸部破片、深鉢形、口縁上に小突起が認められる。文様は地文がなく、爪型文と直線文及び曲線文の配合からなるが、文様は口頸部のみに見られる（第一九図）。

例5　A.122　口頸部破片、深鉢形。水平口縁である。文様は地文がなく、口頸部に二列の爪型文が見られる。本例は或は第一類となすべきであるかも知れないが、仮に本類に入れた（第一九図）。

例6　A.285　底部破片、深鉢形、揚底。文様は地文がなく、直線文と曲線文が数条全器面に見られる（第一九図）。

例7　A.18　口頸胴部破片、浅鉢形?。口縁上に小突起二ヶ一組で認められる。文様は地文がなく、爪型文と短直線文及び直線文の配合によつて構成されるが、文様は口頸部から体部の全面に施文されている（第一八図）。

例8　A.133　口頸部破片、浅鉢形?。口縁上に押圧による刻目が整然と見られる。文様は地文がなく、爪型文と直線文を整然と排列したもので、本例では三列の爪型文、三条の直線文、三列の爪型文が順に重畳している。なお器の全面に施文している（第一八図）。

例9　A.209　口頸部破片、浅鉢形?。水平口縁。文様は地文がなく、直線文と短曲線文及び爪型文の配合によつて構成されている。一種の三叉文が見られる（第一九図）。

例10　A.43　口頸部破片、浅鉢形?。口縁上に突起がある。文様は地文がなく、短曲線文と爪型文の配合によつて構成され、一種の三叉文をなしている（第一九図）。

例11　A.71　口頸部破片、浅鉢形?。口縁上に突起が認められる。文様は地文がなく、直線文と爪型文の配合によつて構成されている。また貼附文も見られる（第一九図）。

例12　A.336　やや完形、浅鉢形、高さ一一・四糎、口径二二・四糎、底径一六糎、厚さ〇・五―一糎。器形は口径と底径の差のすくない浅鉢形で、口縁は水平をなしている。底は平底である。文様は地文がなく、器の全面に爪型文と直線文を交互に施文し、更に浮文的に波状文を構成している。また底面全面にも爪型文を施文している（写真二二及び第一六図）。

（訂正）　本資料については、筆者らが先に報告した「桧山南部の遺跡」（昭和三〇年七月）の写真一一及び第一〇頁の本文と第一一頁第一一図に、野幌式土器として記載したが、今回の調査によつてそれが誤りであることが判明したので、ここに晩期の土器であることを明らかにして前文を訂正する。

例13　A.337　やや完形、浅鉢形、高さ九―一〇・三糎、口径一四糎、底糎五糎、厚さ〇・五糎。水平口縁をなす。底は軽い場底である。文様は無文である（写真二二及び第一七図）。

例14　A.339　やや完形、浅鉢形、高さ七糎、口径一三・一糎、口縁上に刻目を施しているが、その他には文様がなく無文である。底は丸底である（第一七図）。

例15　A.10　やや完形、浅鉢形、高さ四・五糎、口径一〇糎、厚さ〇・三―〇・五糎。水平口縁、丸底で、文様は無文である（第一七図）。

例16　A.226　口頸部破片、浅鉢形、水平口縁をなす。文様は地文なく、口頸部に直線文と爪型文の文様化したものが見られる（第一九図）。

例18　A.338　やや完形、広口壺形、高さ九糎、口径一一・七糎、底径四糎、厚さ〇・五糎、口縁は水平をなし、底は揚底である。文様は地文がなく、口頸部から胴部までの間に直線文と短曲線文及び爪型文を配合している。また底面にも爪型文を施文している（写真二二及び第一七図）。

（訂正）本資料については、筆者らが先に報告した「桧山南部の遺跡」（昭和三〇年七月）の第一〇頁の本文と第一一頁の一一図に、野幌式土器として記載したが、本式土器も晩期の土器であることが判明したので、前文を訂正する。

例19　A.258　口頸胴部破片、壺形。文様は地文なく、直線文と短曲線文の配合によつて一種の羊歯状文を形成している（第一八図）。

例20　番外5　口頸胴部破片、壺形。文様は地文がなく、直線文と曲線文、爪型文を重畳して施文している（第一九図）。

例21　A.261　胴部破片、壺形、文様は地文なく、直線文、曲線文、爪型文を配合して施文している（第一九図）。

例22　A.256　胴部破片、壺形?。文様は地文の縄文がわずかに見られるが、四条の刻線文を挟んで、数列の爪型文を上下に施文している（第一八図）。

例23　A.225　胴部破片、壺形?。文様は地文がなく、直線文、爪型文、爪型文でつくつた羽状文、直線文と重畳して施文して多彩である（第一八図）。

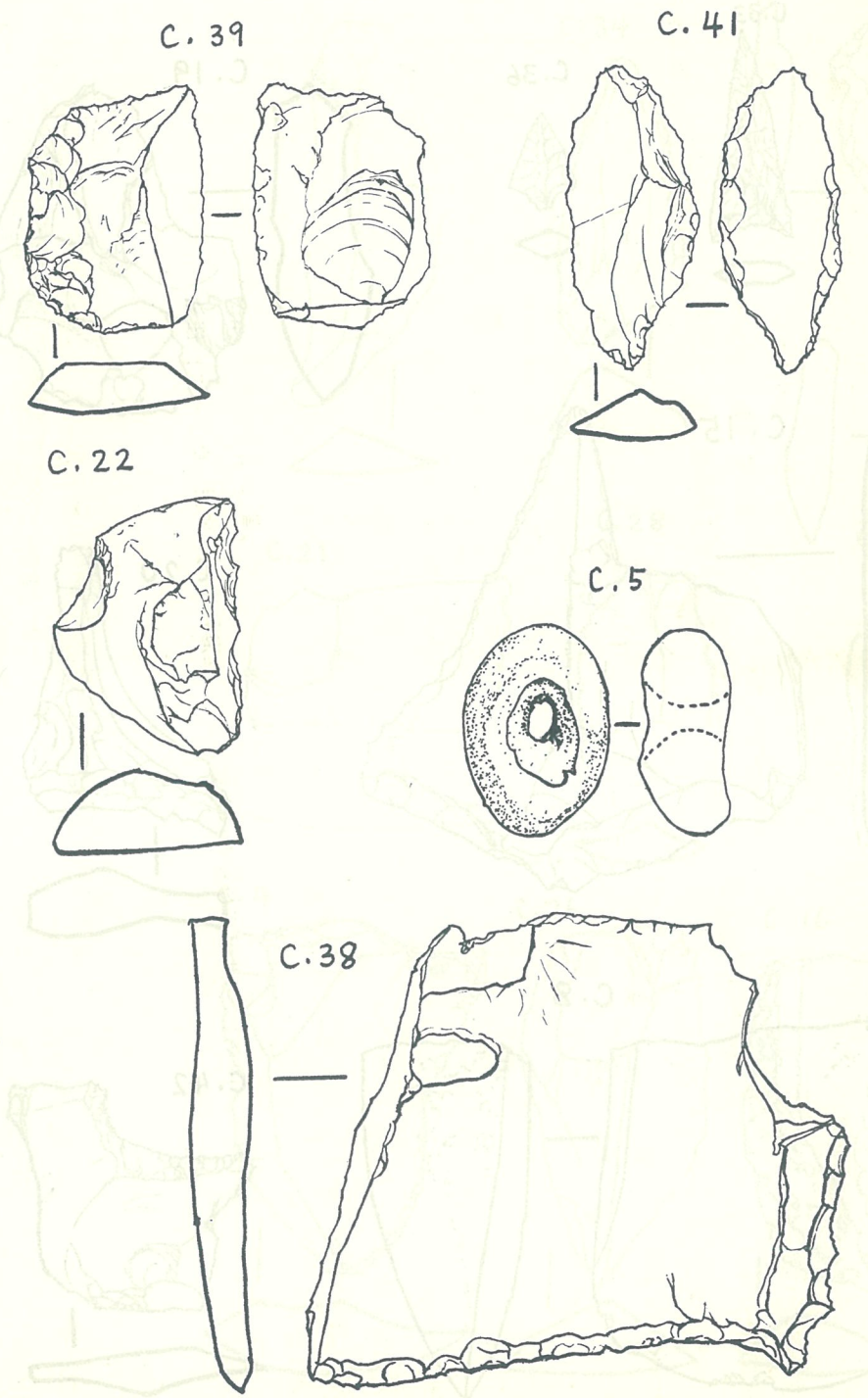
例24　番外7　口頸部破片、皿形。口縁は水平口縁をなす。文様は地文がなく、直線文と短曲線文が、一種の三叉文をなしている（第一九図）。

第二節　石　器

出土した石器は土器の数に比して少数である。種類は石鏃二ケ、石小刀四ケ、粗製石小刀八ケ、石錐一ケ、石斧一ケ、ノッチ三ケ、庖丁形石器一ケ、スクレーパー二ケなどで合計二二ケである。これらの出現頻度は第三表に示したので参照されたい。石器各々の詳細はつぎの如くであ

まちがい. C39 → C22
C22 → C39

第 22 図　第 3—4 層出土の石器 3



る。なお石器の主要なものは写真三七―三八及び第二〇―二二図に示したので参照されたい。

石　鏃

完形品が二ケ出土している。一例（C.33）は長さ三・四糎、幅一・四糎、厚さ〇・四糎で、抉入のある無柄石鏃である。他の一例（C.36）は長さ一・五糎、幅一糎、厚さ〇・五糎の小型で有柄石鏃である。石質はいずれも黒曜石である（写真三八及び第二一図）。

石　小　刀

完形品二ケ、不完形二ケ計四ケが出土している。四ケ中一ケは横型、二ケは横型と縦型の中間型式、一ケは不明である。すなわち一例（C.6）は縦型有柄で、剥片を利用した長さ三・七糎、幅四・二糎、厚さ一・四糎で略四角形をなし、柄を除く三辺がサイド・スクレーパー状に作出されている。一例（C.27）は縦、横中間型式で、これも剥片を利用しており、表裏とも平坦面をなしている。長さ六・五糎、幅二・八糎、厚さ〇・八糎で、楕円形をなし柄を除いた二辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。一例（C.40）は不完形であるが、縦、横中間型式と思われるもので、長さ現存四・三糎、幅二・四糎、厚さ〇・八糎、柄を除いた二辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。一例（C.34）は長さ現存五・二糎、幅二・二糎、厚さ一・一糎で、一辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている（写真三七及び第二〇図）。

粗製石小刀

完形品六ケ、不完形品二ケの計八ケが出土している。いずれも一面が平坦面をなし他の一面に数剥離面を有する剥片を利用して、ナイフ或はサイド・スクレーパーに使用したと思われる種類のものである。（C.4）は長さ六・五糎、幅四・五糎、厚さ一・三糎で、二辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。石質は頁岩である。その他（C14, 16, 21, 23, 26, 28）の六例は前例同様いずれも一面が平坦面をなし、一面に数稜数剥離面を有する、長さ七糎前後、幅三糎前後の横長の剥片を利用したもので、一辺縁乃至二辺縁が刃状になつている。石質は頁岩五例、硅岩一例である。（C.41）は長さ四・八糎、幅二糎、厚さ〇・七糎の小型楕円形のもので全辺縁がサイド・スクレーパー状に作出されている。石質は粘板岩である（写真三七―三八及び第二〇図）。

石　錐

完形品一ヶ(C.15)が出土している。本資料は体部と針部からなつている有頭石錐である。体部は長さ七・二糎、幅四・九糎、厚さ〇・六糎で、針部は長さ二・三糎、茎部幅一・六糎である。石質は粘板岩である(第二一図)。

石斧

不完形品一ヶ(C.8)が出土している。本資料は長さ推定一二糎(現存五・六糎)、幅五・二糎、厚さ二・六糎である。刃の側面観は両刃であり、正面観は曲刃をなす。よく磨研されたいわゆる蛤刃の石斧である。石質は緑色泥岩である(写真三七及び第二一図)。

ノッチ

完形品三ヶが出土している。一例は(C.42)長さ四糎、幅三糎、厚さ〇・五糎のやや四角形の剥片の一辺縁に加工して曲弯部をつくつたものである。一例(C.20)は適宜な剥片の一辺縁の曲弯した剥離面を利用したものである。一例は(C.19)は長径五・四糎、短径三・九糎、厚さ一・四糎の楕円形の石屑の一辺縁を打ち欠いて曲弯部をつくつたものである。石質はいずれも硅岩である(写真三七・三八及び第二一図)。

スクレーパー

完形品二ヶが出土している。いずれも一面が平坦面をなし、一面の辺縁を加工したもので、形は楕円形に近い小型のものである。すなわち(C.22)は長さ三・七糎、幅二・七糎、厚さ〇・六糎で、全辺縁がスクレーパー状に作出されている。(C.39)は長さ四糎、幅二・九糎、厚さ一・二糎で、半月形の一縁だけがスクレーパー状に作出されている。石質は両例とも硅岩である(写真三八及び第二二図)。

庖丁形石器

完形品が一ヶ出土している。すなわち(C.38)は四角形に近い薄く大型の庖丁形の石器で、高さ七・一糎、幅八糎、厚さ一糎である。両面とも平坦面をなしている。刃は二辺縁に見られる。石質は粘板岩である(第二二図)。

第3表　石器、装身具の出土数と石質

種類	完形 頁岩	完形 硅岩	完形 粘板岩	完形 黒曜石	完形 安山岩	不完形 頁岩	不完形 緑色泥岩	合計
石鏃				2				2
石小刀	2					2		4
粗製石小刀	4	1	1			2		8
石錐			1					1
石斧							1	1
ノッチ		3						3
スクレーパー		2						2
庖丁形石器			1					1
垂飾					1			1
合計	6	6	3	2	1	4	1	23

（註）石屑は75ケ出土しており、石質は頁岩、硅岩、粘板岩があるが、大部分は頁岩である。

装身具と思われるものが一ケ出土している。すなわち（C.5）は楕円形の小石の中央部を穿孔したもので、一種の垂飾と思われる。長径六・四糎、短径二・六糎、厚さ一・五糎であり、中央部の孔はいわゆる虫食いといわれる部位で、ここに穿孔したもので、孔の長径は〇・七糎である。石質は安山岩である（写真三八及び二二図）。

第四節　自然遺物

一　動物骨格類

頭蓋骨の小破片が三十数片発見された。これらの骨は化石化して硬い。形態から判断すれば、その曲弯の状態、縫合の状態、厚さなどから、かなり人骨に近い印象を受けるが、人骨と断定するには細片すぎる。なお本骨格片が動物とすれば、あざらしなどの幼獣に近い形態であるが、その真偽は明らかでない。四肢骨の破片が十数片同時に出土しているが、これらは人骨ではなく、全例小動物の管状骨である（写真三九）。

二　貝類

貝類はわずかに四個体四片が出土している。その種類はつぎの如くである（写真四〇）。

あかがい　Anadara (S.) broughtonii (Schrenck)

うばがい　Spisula cf. sachalinensis (Schrench)

うばとりがい　Serripes sp.

本遺跡の第一層よりは擦文式土器並びに須恵器が出土し、第三層—第四層よりはいわゆる亀ヶ岡式土器の上葉乃至中葉に位置するものと、これに伴出する石器類が出土している。

本遺跡の第一層より出土した擦文式土器の特徴は、器質堅緻で、器形は口頸部が外弯し、平縁で平底の深鉢形が大多数を占めている。文様は擦痕が器の全面に見られ、口頸部附近には刻線文を施文するが、体部に及ぶことはすくなく、文様は概して単純である。本遺跡出土の擦文式土器を道中央部、道北部の同式土器に比較すれば、一般に文様が簡略であるように推察される。また須恵器破片が出土しているが、おそらく本土器は擦文式土器と伴出したもので、年代的には並行関係にあるものと考えられる。

本遺跡の第一層で認められた住居遺構は、円形に近く、直径四・八五米前後と推定される。円形の外郭の内縁に柱穴を排列している。本住居趾の年代を決定する確証はえられなかつたが、おそらく擦文文化期以降に構築されたものと推察される。

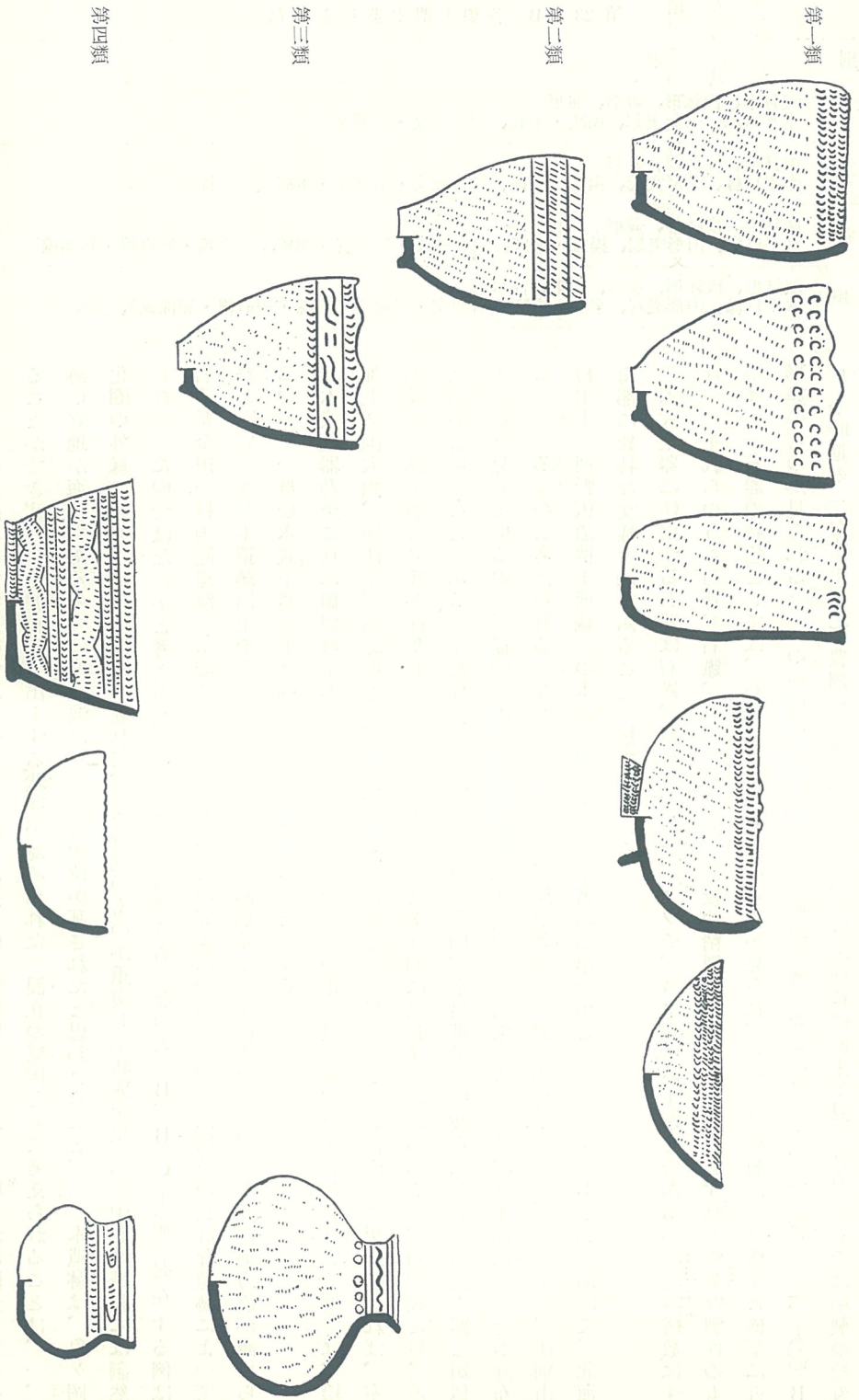
本遺跡の第三層—第四層より出土した、いわゆる亀ヶ岡式土器には、実質的には精製品と粗製品とがあるが、資料が乏しいので、精粗に截然と分けるのを避けてつぎの四分類を行つた。すなわち第一類より第四類に分類したが、これらには若干の種類が見られる。各類土器の特徴については第三章に詳述したが、器形と諸特徴を要約して、第二三図A、Bに模式として示した。なお各類土器の顕著な特徴をあげればつぎの如くである。

すなわち本式土器の器質は堅緻であり、厚さは薄い。器形は深鉢形、浅鉢形、壺形、皿形、注口形などが見られる。各形土器の出現頻度は第一類、第二類土器では深鉢形が多く、第三類土器では深鉢形についで浅鉢形が多くなり、第四類土器では深鉢形と浅鉢形とがほぼ同数となる。器の大いさは大型のものもあるが概して中型のものが多い。口縁部は水平口縁のものと、二ヶ乃至三ヶ一組の山形小突起、あるいは波状の突起を有するものとが見られる。底は第一類、第二類、第三類土器では揚底が大多数を占めているが、第四類土器では平底が多い。文様は第一類、第二類、第三類土器では、地文として斜行縄文が附されるが、第四類土器には地文が殆んど見られない。各類土器を通じて普遍的に見られる文様は爪型文で、主として口頸部附近に並列して数列整然と施文される。文様構成は第一類土器では爪型文、第二類土器では爪型文と直線文、第三類、第四類土器では爪型文と直線文・曲線文が夫々文様要素となるが、第四類土器ではこのほかに磨消手法が盛行し、また朱塗土器及び無文のものも見られる。なお本遺跡の小範囲での出土品であるので、器形乃至文様についてはここに記述したほかにも、他の種類のものがありうることはいうまでもない。

本遺跡出土のいわゆる亀ヶ岡式土器の編年的位置は、第三類、第四類土器に見られる、短直線及び短曲線で構成された文様は、いわゆる大洞式土器の三叉状入組文乃至羊歯状文に近似しており、大洞、B、B-C、C_1、C_2 といわれる範囲のものである。しかしながら大洞 B-C—C_1 がその主体を占めているので、本資料は編年的には大洞 B-C—C_1 の時期に比定しうるものと考えられる。なお資料は大洞 B、B-C、C_1、C_2 の

（謝　辞）

本報告書の作製に当り、東京大学山内清男氏、東京国立博物館佐藤達夫氏、慶応大学江坂輝弥氏、小樽博物館竹田輝雄氏、釧路博物館沢四郎氏に種々御助言をいただいた。また出土石器の石質については北海道大学石井次郎氏、貝類については魚住吾氏並びに藤江力氏の御監定をいた



第23図A　各類土器の器形

上ノ国遺跡

昭和三十六年五月二十日印刷
昭和三十六年五月三十日発行

〔非売品〕

印刷所　札幌市北一条西二丁目　札幌印刷株式会社

発行者　北海道檜山郡上ノ国村役場
同　上ノ国村教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正
三		⑧蛎崎島	⑧蛎崎島
六	七	煕さ	深さ
六	七	木炭末が多数に	木炭末が多量に
七	一一	円筒文化	円筒土器文化
八	一五	円筒文化	円筒土器文化
一五	二三	仙型文	仙型文
四一	一五	(schrench)	(schrenck)
四五	五	こゝ謹んで	こゝに謹んで